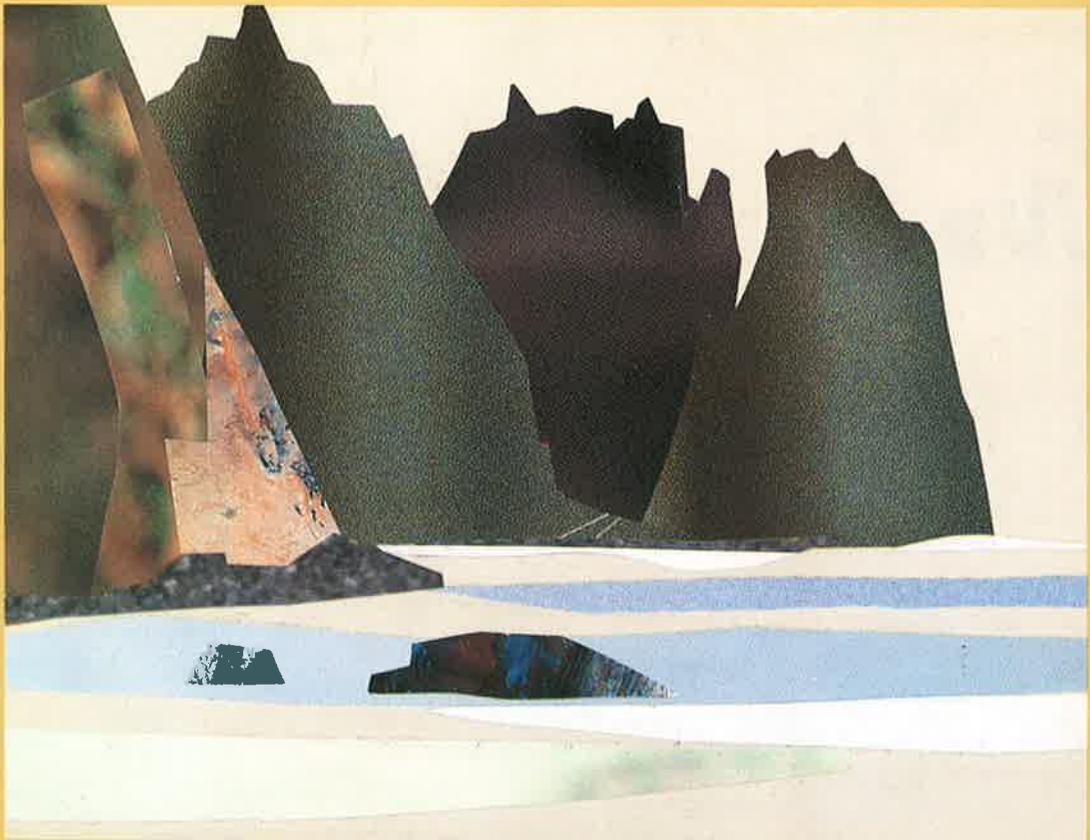


# 波之鳥

第 14 号 1993



室蘭市医師親交会誌

# 波之鳥

第 14 号 1993

室蘭市医師親交会誌

# 目次

表紙  
ブトフレナイ  
(裏チャラツナイ)  
加藤治良  
カッタ  
竹内隆一・吉井正仁

## 随想

堀河帝崩御 — 讃岐典侍日記のこと — ..... 加藤 治良 ..... 1

中登別周辺について ..... 千葉 壽良 ..... 5

恩師の思い出 ..... 中村 秀 ..... 8

## 座談会

親父と息子・その風景 ..... 9

池田洋二・洋輔

開田吉廣・博之

編集委員 (加藤・澤山・大久保・三村・斎藤)

事務局 (高橋・小杉)

あんらくいす

.....

- 歴史的日本製鋼所部長住宅賛歌 ..... 辻 寧重
- 我もまたアルカディアにーイタリー紀行ー ..... 上田 智夫
- 親交会40年記念・台湾旅行 ..... 齋藤美知子

新会員・自己紹介

.....

国本孝夫・国本えみ子・角 哲雄・池田洋輔・開田博之

- 親交会のおもな行事
- 会員名簿
- 会員異動

編集室へのお便り

.....

編集後記

.....

澤山 豊

## 随想

### 堀河帝崩御

— 讚岐典侍日記のこと

加藤 治良

(加藤内科医院)

— もろともに、八年の春秋つかうまつりしほど、常はめでたき御こと多く、あしたの御おこなひ、ゆふべの御笛の音わすれがたさに、なぐさむや、と思ひいづることども書きつづくれれば—

◇

『讚岐典侍日記』の作者とされる藤原長子は、歌人としても知られていた讚岐入道藤原顕綱の娘。曾祖父が藤原道綱で、その道綱の母が『蜻蛉日記』の作者という系譜になる。

康和二年(一一〇〇)、二十二歳のとき長子は、御乳人である姉の藤三位の推挙によって堀河天皇のもとに出仕した。典侍とは秘書のような役職である。堀河帝は白河法皇の御子で、践祚は八歳、崩ぜられたのは二十九歳。詩歌管弦を愛され、側近の人々への心遣いも細やかで、ことに同年の長子には「すけよ、すけよ」と呼びかけられ、主従と思われぬほどの気易さで接していられた。なお、十九歳年上の中宮・篤子との間に皇子、皇女はいない。女御の苺子が生んだ宗仁親王が次の幼帝(四歳)鳥羽天皇である。

『日記』の上巻で長子は、帝の発病から崩御までの一か月を

回想する。冷静かつ克明な記述には特異という言葉がよく用いられているが、まことそのとおり。中世宮廷貴族社会なのだが、重態になられてからの帝とその周辺の描写が、千年の後世に生きる私などにも、似たような別離の風景、そのいくつかを思い出させてくれるのである。

誕生と終焉の場が、わが家ではなく、病院の一室とほぼ定った当節ともなれば、このような「日記」のたぐいは、もはや書かれることもあるまいという、一種の感慨すら覚える。

以下、しかるべき行条の流れを追ってゆきたいと思う。

◇

七月六日のこと。帝のご様子は、これまでになくお苦しげに見うけられ、暑さのせいばかりとも思えず、この先どうなることかと、だれもが胸つぶれる思いに嘆きあう。折あしく上臈たちは、出産やら母の喪などで里にこもったまま、まだ参内されていない。御乳人の藤三位は熱病きみで臥せておられるし、弁三位は幼い東宮のご養育にかかりきり。お側に侍っているのは、大式三位、大臣殿三位と私の三人だけ。

〔日が暮れるにつれ御苦しみは只事ならず、白河院に使者が立つ。法皇驚かれ、堀河御所に近い北の院にお出ましになる。〕

その夜は、大殿油を常よりもお側近くに寄せた。帝のみ胸が荒まれるとき灯心の焰が大きく揺らいで、お命の証とも思われていたのに——その焰の揺れが、ふつと止まった。

「あ、あ、御息が絶えておしまいになる……」

〔にわかのお大变に入々はみな立ち騒ぎ、泣きうろたえた。内大臣と関白殿が参上され、お傍に寄り添い身じろぎもさ

れない。内、外の誰もが大きくざわめき立った。頼基僧正がまず参内されて経を読み、ひたすらみ佛を頼りまいらせるうち、帝のお体が僅かに動かれた。「おお、戻られた」お側の人々はひとときわうちどよめく。

私の差し上げたお粥を、ほんの少しだけ召し上がった帝は「今はただ、九壇の護摩と懺法を行い、なすべきことは何事も今夜のうちに、と白河院に申し上げよ」と関白殿に仰せになった。——去年、おとしのご病氣のときも東宮いまだ幼きゆえ、そのままに。こたびも、そこまでなさることもあるまい——という院のお言葉なそうで、ああ、御讓位のこととさとりはしたけれど、私の膝の上にお御足をうちかけられ、「帝のわたくしが今日明日かもしれないというのに、皆にはそれがわからないのか。すけよ、おまえはどう思う」とお尋ねになられても、どうお答えしてよいのか私にはわからない。ただ涙にむせぶばかりだった。

時折ひどいお苦しみが襲ってきて片時もお傍を離れられない。耐え難いほどの夏の夜の暑さもおぼえず、乳母のように添いふし参らせ、ただただ御顔を見守りながら、お仕えしてからの優しいお心づかいのあれこれを想いつづける。

「すけよ、なぜ寝まぬ」弱々しい御目で私をご覧になり、「こうしてみようか、少しは苦しさが和らぐかもしれない」枕元に置いてある神爾の入った函をおとりになり、そつと胸の上にのせられた。函が上下にひどく揺れ、短く絶え絶えの御息の音が、恐ろしいばかりに私の心を打つ。お粥を少し召し上がった御目をつぶられた。明けの鐘の音に、鴉の声なども聞こえてきた時の嬉しさ。ひとまず私は局に下がった。

十五日のこと。中宮の宣旨役の女房から「仰せ書」が届けられた。藤三位が侍っておられた頃は、こまやかに御様子などもお聞きしていたのですが、このところは大方のご返事のみなので気がかりでなりません。中宮はあなたのことを、藤三位と同じく親身に思っておいでなのです。今の御様子を細かに申し上げてくださるように。

「誰からの文か」とのお尋ねに、中宮の御方から、と申し上げると、「昼頃に参上するように」との仰せなので、その由を文に書いてお知らせする。

中宮が参上なされたので人々はみな御前を下がった。夕刻にはお帰りになされたが、「すこし夜が明けたような心地がある」との仰せに、皆の嬉しさはたとえようもなかった。

氷を山のように盛り上げた金物の鉢を御覧になり「あれはいい、さわやかな心地がする。皆を集めて食べさせよ。それが見たい」などと。さっそくに関白殿、左衛門督、源中納言、宰相の中将、左大弁がたが御簾の前に並び、内大臣殿が氷を一人一人に配られ、ご自分も一つ、ひよいと口に含まれた。幼子の遊びとも見えるだけに、この人々の心の内こそおしはかられて、几帳の中私たちは顔を袖におしあて、どうか、このままよくおなりになつてくださるませ、と念じていた。

「その夜、帝は苦しまれ、増誉僧正が召され加持を参らす。十六日は終日苦しみひどく、十七日には全身にむくみが見られ、「耳がよく聞えぬ」と言われる。十八日には、比叡山の修行僧十二人の加持祈禱と、三井寺の行尊、さらに多くの高德の僧が祈禱をつづけるうち、ついに物の怪が正体を現し名乗り騒いだ。中宮はふただび参上。白河院の御言葉

があり、堀河帝は（戒）を受けられたが、十戒の問いに答える御声は聞き取れぬほどに弱々しかった。」

局に下がっていた私に急ぎのお呼びがあった。大式三位が抱きかかえられ、大臣殿三位が添い臥しておられる。お御足をおさすりしているうち、息づかいが心持ち楽になられたよう、替わって私が添い臥し申しあげる。

ややあつて、定海をお呼びになり、「観音経を聴かせよ」と仰せられた。私にお御足をうちかけ、御手をのせられる。ひどいお汗なので陸奥紙で鬢のあたりを拭いてさしあげる。

「すけよ、ひどく苦しくなってきた。いま死のうとしているのだな……南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と口ずさまれる。

常には、不吉なことよと、念仏を唱えたりはなさらず、下仕えの者たちにもそう仰せだった帝のお口から、いま何のためらいもなく称名が流れてくる。関白殿が顔を寄せられ「お書きになつておられた大般若心経はどちらでございますか。お持ち致しますから、それを念じさせたまえ」帝はうなづかれたが、ひどく咳きあげられ、「もう、死ぬのだな。大神宮よ、お力をおかし下さい。南無平等大慧講妙法華……苦しい抱き起こしてくれ……」

お背に腕を添えてお起こし申そうとして、はつとした。あれほど重げにさえ覚えていたのに、うろたえるほどの軽さ。この暑さというのに、いぶかしいまでに冷ややかな御手。

〔十二人の延暦寺修行僧の祈禱が行われ、増誉僧正が参内して一心不乱に念ずるが何の効験もない。〕

かすかに念仏を唱えておられた帝の御口はついに、まったく動きをやめてしまわれた。もはやこれまでと、関白は白

河院に知らせるべく民部卿を召され、内大臣が御枕を北に直された。

日の光がさしはじめる。十九日であった。」

色白に、むくんでおられた御顔は、まこと清らかに、鬢のあたりなどは今の今お櫛をお入れしたかのようで、ご生前の御寝そのままの様子に見えた。僧正が静かに座を立ち、御障子をひそと引いて出ていかれると、大式三位が「ああ、なんとこのことをしでかして出ていかれてしまうのです。帝の命をお戻しください」と声を限りに泣き伏す。お側の人々が一時に泣きはじめたので、地震のように御障子が揺れた。

「お生れになられたときから片時もお傍を離れずまいりましたものを……ぜひ、ご一緒させてくださりませ」大式殿は帝の御手をとって叫びくどかれる。ちょうどその時、延暦寺座主・仁源殿が参上して障子を引き開けられた。「山の座主が今ごろ見えて、何をなさるおつもりか」と、大式殿はなおも激しく泣きつづける。修行僧の祈禱がびたりと止んだ。

障子がまた引き開けられ、何かが投げ入れられた、と見えしたのは藤三位殿であった。「ああ、情けなや、最後の折にかぎってお世話がかなわなかつたとは。病を得たわが身のふしあわせが口惜しうございます」と言い続け泣きくづれる。

私は、さきほどお汗を拭いてさしあげた陸奥紙を顔におしあてたままでいた。なぜ、あの人गतのように声を上げて泣けないのだろう。誰よりも帝を思いまいらせっていると信じてきたこの私なのに、乳母たちの思いにはやはり及ばなかったのだろうか……。

内大臣殿が泣きながら出てゆかれる。すぐさま源大納言と

右大臣が見えて、お部屋の御格子をはたはたと下ろして立ち去ってしまった。何としたこと、あまりといえばあまり。「ああ、ひどいことを。せめて明るいままで御顔を見守りまいらせてと思っていましたのに」と、藤三位殿が声を惜しまずお泣きになった。

内大臣殿がまた見えられて「御召し物をお着替え申し上げねば——御畳も薄くせねば」と泣きながらおっしゃって、御単衣を取り寄せられ、おかぶせ申し上げなどする。

大臣殿三位が長押の下によるめき降りると、息絶えたようにそのまま横になってしまった。三位のお子の中納言殿が女房と二人で、かきすくうようにいたわりながら抱きかかえてゆかれた。

藤三位殿は、早口にとぎれることなく言い続け、くどき続けていられる。内大臣殿が「お連れ申せ」と言われる。「もう、どうしようもないのです。さあ、お下がりをさいませ」という私に「何をおっしゃる、せめて今一度御顔をお見せいだきたかったのに。この恨めしさ、おわかりになりませぬか」と私の罪でもあるかのように激しく泣きくどかれる。

冷たい御腕は、でもまだ、御生前のようにしなやかに感じられる。もしやいま一度のお言葉が、とも思われ、しいて退出をすすめずに、二人で御腕をおとり申してすわっていたのだが……。いつの間にか変わるのか、御腕は固く固くなりはてておしまいになった……。今はもう、と「さあ、局にお下がりくださいませ。もしやの望みもかなくなりましたもの」と引き離そうとするのだが、「帝お一人をお残しして行くわけには参りませぬ」と、なおも御なきがらにひたりとお取

りつきになられる。もう分別をもなくしていらつしやるのだと思ひ、私に仕える女房たちを呼び寄せ、無理に背中におのせして退出させた。

乳母方が退出されたあと、因幡の内侍と二人、いつまでもお傍に侍っていた。

「典侍どの、あなたほど深いご縁の方はございません。最後までお仕えなさいましたものね」と、いわれたとき、耐えがたい悲しみにおそわれた私は、とめどなくあふれる涙をどうすることもできなかつた。

〔日が暮れて、遠くで人の立ち騒ぐ声や物音が局に下がった長子の耳にも届いてくる。御帳をとりこわす音などで、神爾と宝剣が新しい天皇のもとへお移りになるのであつた。〕



さて、この小文はいわば私風紹介に過ぎないが、古典とのつき合ひはこの程度の気安さもまた楽しい。「注解」の類はさらりと眺め、古典特有のリズムの感触をおろそかに思ひさへしなければ、偏頭痛や肩こりの誘因とはならない。

そして、このような醒めた記述ができる女性とは——知るかぎりの顔や気質・性格を思い浮かべながら、千年の隔たりを忘れて、讃岐典侍・藤原長子なるひとを、眉の近くに描いて見ようとするのだが。

(おわり)

## 中登別周辺について

千葉 壽 良

(三愛病院)

私がこの地に居住するようになってから、二十八年になる。中登別町となると案外広く下は高速道の下で元トンネルであった所から上は紅葉大橋及びその近くの高台の団地迄。横はクッタラ湖に行く途中白老町と標示されているので、略登別市と白老町の境界の一部となっている。反対側は登別川（ヌプルベツ）に面して紀文岱一帯が入る。

以前は温泉街道の両側に緑の樹林と笹藪があり、少々の住宅及び商店が点在し、桜のトンネルは自慢に値するものであった。しかし昭和六十年十月に登別東インターが開通してから千歳空港及び札幌への交通は極めて便利となり、インターからの上下道が大きく変わりつつある。インターへの進入路はすべて四車線となり、夜間照明のお蔭で付近一帯は夜の暗闇より浮び上ることになる。特に桜のトンネルの部分は緑の回廊とネーミングして、片側の桜並木は中央分離帯として四車線とし、両側共インターからカラードプロックの歩道を造り、所々に石垣式の花壇を併設することになっている。但し私は

桜が街路樹として適当かどうかは疑問に考えている。特に、このエゾヤマザクラは相当年数も経ており年々弱り気味であるので日本サクラの会のメンバーとしても機会ある度に苦言を呈している次第である。桜は根が浅く根は自分の高さ位は横に伸びるものだから、初年度の工事期雪のチラチラする頃になって、一応根の廻りは型通りムシロで巻いたもので、のぞいて見たら土はぼろぼろであった。古木はそれなりに注意して移設したものの殆ど枯れて仕舞った。それ以来こういうことはなくなつたようだ。緑の回廊の一側面は殆どユートピア牧場に接している。ここは戦時中馬事訓練場として軍馬の育成につとめ、戦後競走馬としてサラブレッドを飼育している。少頭数精鋭主義で今年の春の天皇賞の栄冠に輝いたライスシャワーもこの生産馬である。生産馬の中にはこの他にもG I レースを色々とつていると云うが残念乍ら私は知らない。このレースでは「また春に一つ、きざむ英雄史」とJRA インフォメーションが新聞紙上に載つたがライスシャワーのオーナーの名前と偶然一致しているのも面白い。降雪も少なく、春は早くから放牧も可能だと云う。ユートピア牧場は元々室蘭工大の奥にあつたが、高速道で収用された面積も多く、登別の牧場の役割も大きくなつたと思う。

温泉街道に並行して小さい川が流れているがこれを「ポンアヨロ川」と云う。川はクッタラ湖道路で右折し、四方嶺の国有林に源流を持つ。途中で中登別のカムイワツカ、緑川等の支流をまとめ乍ら、旧トンネルの所で当然左折して白老に向かう。ポンはアイヌ語で小さいと云う意味。アヨロは矢又は矢箱、矢の如く走る等と書いてあるが定説はない。私はこ

の矢の如く走るに興味を持ちたい。この地区は元々降雨量の多い方、山が太平洋に近接して、降雨量の多い時は普段流量の少ない河程水量が増水して一気に流れ去る。アイヌの矢箱は筒状のものではなく、肩にかける曲線を呈した矢箱そのもので、矢は一本一本やや放射状にならないでいる。彼等は非常に比喩的な表現をする方法をとるので、矢箱そのものが太平洋、曲がりくねった矢はあまり使いものにならないから、あまり考えすぎないでただ矢の如く走り去る川「アヨロ」と表現したのだと考えている。昭和五十八年九月この川が氾濫して、一部を残してすべての橋は流れ去り左折すべき山には皮肉にも立派な流水路旧トンネルがあったので、多数の樹木その他と共に下町に流れ去った。幸い一人も死亡者を出さなかったことは不思議な位である。時間はかかったが、河川の改修が完成し目にも楽しい新しいポンアヨロ川が完成した。氾濫したその日、市会議員で消防団員でもある男が満タンにした消防車で汐見坂を登り、途中普通乗用車で流されてくる男性三人を救い、車はそのまま流れ、三人は消防車に乗りかえて助かった話があるが、あまり知られていない。全く危機一髪の出来事ではあった。

川のせせらぎ、小鳥のさえずりと云えば、ストレス解消法のαミュージックのCDが流行して、よく音楽の合間に出てくるのは普通になっている。うれしい事には、中登別では時期になると裏山でも、必ずウグイスが来てくれる。そして毎年見事な鳴き声を披露してくれ、年中行事の一つになっている。勿論その他の小鳥も林の中にも私の庭にも遊びに来る。動物ではキタキツネは遠慮もなく私達の側によって来る他、

夜になると何んとも云えない声で泣いてくれる。信じられないことにエゾシカがいると云う事だ。隣の御主人の話ではその方の裏山にエゾシカの遊び場があり、毛づくろいの裸木があつて、その廻りはすっかり平になっていると云う。何しろその近くに湧水があり深水となつて流れているから、エゾシカにとつては楽しい場所であるには違いない所だと思ふ。考えて見ると一つ一つの峰はすべてオロフレ山系の麓と考えれば納得出来る。川の流れる沢は彼等にとつて適当な遊び場所なのかも知れない。更にその廻りは樹木が密生して容易に人が近づくと事も出来なくなっている。又この水源は以前登別の上水道として利用されていたと云うから面白い。鹿と云えば数年前裏山に人参を作っていたが、角のまだ完成していない若い一頭のエゾシカが、人参の匂いに誘われて現れ利口にも前脚で土を掘つて人参を食べていた事があつた。私も優雅な気持ちになつて三、四日様子を見ていたが、鹿は逃げなかつた。しかし我慢出来ない人達が、十数人で鹿に近づいてから鹿は大きく跳躍して姿を消した。又温泉街道をこちらからユートピア牧場の方に横切る鹿の姿も何人もの人達が見ている。可哀相にも一頭の鹿が自動車をよけることが出来ず交通事故死した事がある。この時は私達が彼等の居住区に侵入している印象を深く持った思いがある。エゾシカの肉は野生の香りがして味が濃く美味ではあるがあまり食べられない。

今年、登別川に遡上して来た鮭が平年の三倍以上となつた。河口も鮭の群れで真っ黒となり遡上する時は川底が見えない時もあつたと云うが、残念乍ら一万匹以上の鮭が空しく死んだ。私も何回も河口と小学校へ行く途中の橋の上からそ

の様子を見に行ったが、どうも遡上して行く鮭に勢いが無い。魚体自身も今年に限っていつもより大きいようだ。遡上して行く力が少ないものだから同じ所に長い間休止しているし、中には横になつて流れのままに下流に押し流されて行くものもある。偶然、河口で漁業組合関係者が小舟を出して、横たわっている鮭や流れてくるものを引っかけて集め、クレーンのついたトラック二台に網でまとめて処分する所に出会った。オロフレ山系のカルルスから流れてくる川に、温泉より流れてくるクスリサンベツ川が合流して登別川ヌプルベツ（濁った川）として登別の地名にもなっているものである。温泉も流入しているので水温も高く、遡上の開始時期も近隣の河川より少し遅くなると云う話は聞いているが、今年の様な現象は今迄一回もなかった。新大橋より下った所に孵化場があり稚魚の放流は毎年しているが、登別川自身以前より鮭が上がる母なる川としては有名であった。今後良く調査してこのようなことのない様にしてもらいたいものだ。いつそのこと河口に群がる鮭を捕獲して助けてやりたい位だが、沖の定置網は別として法的に禁止されて駄目らしい。前浜には札幌方面の釣り人を含めて、空き間のない程竿が並んでいる。一日の本数も例年より極めて多い。例えば一日三十匹、六十匹と云う話も聞く。中には禁漁区迄進出して平気で竿を下ろしている者もいる。又舟を出して河口で引っかけている者さえあった。今の所次第に落ち着き始めているが、折角の神秘でもある鮭の回帰自然現象が、色々な意味でうまく行かないとは困る。

中登別周辺は不思議に海に近い割には樹木の成長が良く、

赤松等も条件と手入れ次第では見事な姿を作り上げられる。オンコ等も相当大きい木の太いものも多い。温泉からは朝晩風の流れに乗って硫黄の匂いもする。だから緑は更に緑を増して美しくなる。杉の年を経た大木の樹林も見られる。霧に霞む杉林を見ると日本画の世界に引き入れられる。私達も中登別周辺の自然及び動植物とうまく共存して将来につなぐたいと考えている次第である。



中村 秀

(エバグリーンハイツ室蘭)

私の学生時代の恩師である平沢興先生は多くの方が御存知の事と思うが、誠に立派な先生であった。先生の壮年時代、新潟医大解剖学教授として御在任中に教えを受けた。

先生の講義は全学生の待望の時間であった。先生の明快な講義はもとより、授業始めの数分間誠に心に残る人生訓話を聴講したい気持があつたからである。先生の名著『人間の無限の可能性』からは何時も何かと教えを受けている。ベートーベンは二十五歳の時に、先天性梅毒で聴力が段々衰えてきたとき、音楽家のベートーベンは彼自身に向つて訴えた。「勇気を出せ、たとえ肉体にいかなる欠点があろうとも、我魂はこれに打ち勝たねばならぬ。二十五歳、そうだもう二十五歳になつたのだ。男一匹、本物になる覚悟をせねばならぬ」先生はこれを原語で覚えて、はげましの言葉とし、先生御自身努力されたと書かれている。

人間は生まれた時に、皆平等に凡そ一億四千萬の脳細胞を与えられてきている。脳細胞は他の細胞と異なり、生涯その数

を増さない。即ち脳細胞こそが自分自身なのである。この脳細胞の働きをよくするには、脳をよく使うことである。天才は努力に依つて生れるのである、と先生は力説される。解剖学は誠に不勉強であつた私ではあつたが、先生の人間の魅力には常にひかれていた。大学を卒業と同時に就職することに決めていた私は、先生に御挨拶に伺つた。その時、先生はやさしく、「そうか、然し一度は又、大学へ戻つてこいよ」と学究心の大切さを諭されるように話された。後日、私は母校にこそ戻らなかつたが、幸に他に研究する機会を得た。晩年先生に再び御会い出来た楽しい思い出がある。函館市で開かれたロータリー地区大会に先生が招かれて特別講演をされた時である。先生と親しく御話が出来、近況報告をして写真を撮つてお別れしたのであつた。毎年頂いた先生からの年賀状の御住所が京都市左京区浄土寺真如町という。何か先生の御人柄にふさわしく思われてならない。今は亡き先生の温顔を思い浮かべつつ心から御冥福を御祈り申し上げます。

# 座談会

## 親父と息子・その風景

池田洋二(父)・開田吉廣(父)  
池田洋輔(子)・開田博之(子)

編集委員 (加藤・澤山・大久保・三村・斎藤)  
事務局 (高橋・小杉)

平成5年7月29日  
於：ニュージャパン



池田洋二



開田吉廣



池田洋輔



開田博之

加藤 「親子鯨」「親子鷹」いい言葉です。しみじみと、そしてヴィヴィットなものを感じます。鴨井先生お二人もお見えになるはずでしたが、急な事情で残念ということになりました。

私も医療の世界も、今昔の感を身にしみて覚える昨今ですが、一方では人間を診るという意味で昔をふり返る論説や主張も目にふれております。今夕は二組の現役親子を餌にしながら、いくなれば医療風俗的、そんな雰囲気のかなに新旧の対比を流して行くことができればと、期待しておりますので、よろしく。

### 地震と方角

三村 まず、先生は何年生れですか？  
開田(子) 二〇年です。  
三村 先生は？  
池田(子) 昭和十七年です。  
三村 年齢差は？  
開田(父) そう三〇年です。  
池田(子) やはり三〇年近くですね。  
池田(父) 私、大正五年ですから。  
池田(子) 西暦で言ったら？  
池田(父) ……一九一六年。

開田(父) 私は一九二六年。

大久保 洋輔先生は遅い開業ですよ。

池田(子) 本来、こつちに帰るつもりはなかったんです。大学が向こうなんので何をやるにしても向こうの方が都合が良かったですね。ひとつは泣き落とし。

大久保 ああ、やつぱり。(笑)

池田(子) 母親のアレですね。それに一家全部で住みたくなってきましたよ、東京では坪何百万ですから。

大久保 お母さんより本当はこつち?

池田(父) いやいや。強制してもうまく行くものではないし。家内が一番心配したのは地震なんです。私、東京大地震知ってるんですよ、神奈川県で。

小学校一年かな、家の前がサツマイモの畑、その向いの小学校の校舎が殆ど潰れちゃった。津波が来て流されるといふんで、親父が僕を兵子帯で木に縛りつけ、イモ畑に蚊帳を吊って寝てたんだよ。

家内は僕以上に東京住まいが心配なんだよ。

加藤 室蘭近辺は、その点いいですね。地震・雷・火事——火事がありますが、天災の被害はまず少ない土地ですね。

開田(父) でも幌別地区は多いんです

よ。私が来てから二回位洪水がありましてね。登別温泉の厚生年金病院の前を流れている川でドクターが亡くなられました。その後ですか、土砂崩れで病院建て直したのは。潮が満ちてきて川の高さより海面が高くなるのね、それで溢れる。ダムが出来てからコントロールできるようになりましてけど。

大久保 開田家はどんな経過で?

開田(父) ぜんぜん放任主義でした。

聞く所によると、彼の女房のお母さんが方角を見ると、それで年齢的にもこつちの方角が良いということ——天が命じてくれたんですね。呼んだ訳ではないし、行くからと言うんで、そうか、とね。

大久保 室蘭の方角といっても、東から西に長い。西の方はあまり良くない。

開田(父) ハイハイ、ちよつとズレましたかね。(笑)

加藤 そうすると、池田家は地震が非常に大きな要素。

池田(父) それが一つ。

加藤 開田家は方角ですか。

開田(父) ハイ、神がかり。(笑)

もうひとつの理由は、東京の大学を出ているので、外様大名としての不安ね。

五年間、消化器内科で重宝がられたようので感謝はしていたんですが、あちこちから声のかかった個人の大病院も最近はなかなか苦しくなってきましたし、あれこれ考えての末、決心して帰って来たのではないのでしょうか。

加藤 東京ではその点どうですか?

池田(子) 僕は日大なんです。教授の出身というせいもあって手術なんか殆ど慶應と同じ。急患があつて自分の所で間に合わないとき来てくれます。そのかわりご馳走するので仲間意識が生れるんです。東大も同じ趣味の音楽好きが結構いたのでわりと対応は早かつたし、大学の差はあまり感じませんでした。

僕の場合は、一家みんな住みたい、僕達の意見だけでなく父の意見も娘達の意見も聞いていくなら、みんなに良い意見も出てくるという考えがありました。親父が来るんでなかったら、僕が行くしかない——と、まあ諦めまして。

加藤 向うでは趣味仲間が多かつたんですね。

池田(子) 居ました。耳鼻科、婦人科の先生が多かつたですね。こつちへ来て不便はありました。欲しいものが秋葉原に

しかないとか。初めの一年間はひどい所へ帰って来たなと思いましたが、たまに行った時に買い込んでくればいい事ですから。

若いうちは向うの方がいいかも知れません。情報も早いし、いろんな文献も読めます。でも今は、食べ物も美味いし、空気もいい、寒くも暑くもないし、満足しています。地震を考えれば、たしかに東京は住む所じゃないな、と思うようになりました。(笑)

## 親父の姿

三村 池田先生は地震、開田先生は方角と言いますが、お父さんの姿に吸引力があり、魅力あるお父さんだから息子さんは帰られたんじゃないですか？

池田(父) さあ、どうですかね。

開田(父) だいぶ誉められた。(笑)

三村 今はずね、子育ては母親が子供の一生を決定づけると言われますが、本当は父親の姿が子供を決定づけているんです。そういうところで両先生は……。

開田(子) 天災よりも、方角よりも、火事・親父の一番最後の影響が大きいと思

います。僕は高校までここに居て、正式には二十年離れていたんですが、東京に行っても休みになると二ヶ月びっしりここに居ました。家が好きで地元が好きだったからかも知れませんが。

開田(父) 乳離れが悪い。(笑)

開田(子) 子離れが悪い。(笑)

加藤 素人風に考えると、親父の病院を継ぐということは、一時代前ですと気持さえ納得できればよかったですけど、当節はそうはいかないでしょう。診断、治療の方法から機械設備の何からなまでに。

開田(父) そうですね、それに幌別を見ても、室蘭を含めて考えてみても、将来性があるように思われませんか。ただ登別地区だけ見れば、私ぐらいの年齢が殆どなんで、将来ぼつぼつ空いてくるんじゃないか。こちらの斉藤先生のように若い方がどんどん入ってこられれば良いんですけれども。二、三人は二世がいらっしゃるけど、どうもお帰りににはならないらしい。

加藤 内科で言えば聴診器一本の時代じゃないし、折角のハイテクも宝の持ち腐れになりかねないし。

池田(父) 聴診器一本、今は夢の話。

加藤 私の中学の同期は、歯科医を合わせて十三人も医者になったんです。まあ時代のせいもあって雑貨屋の倅の私も、気がついたら一番なりたくない医者になつていたんです。その中の一人、もう亡くなりましたが、医者である親父さんをあまり良く言つてませんでした。頑固で氣むづかしいお父さんでしたが、彼自身も相当シニカルな男で「俺の息子は才能がなかったら医者にする」なんて、冗談か本気か、言つてましたがね。

随筆なんかには、医者である父親像が子供の目には時に神の如く、感動的な魅力ある人間として映つていたように書いてあるのが相当多いんです。そのあたりはどうなんでしょうか。事実、往診だけ考えても昔は大変でしたね。

開田(父) 大変でした。特に田舎は。二セコに居たんですが、雪が深くて電信柱の電球が目の高さにあるんです。二階の窓から出入りするような所でした。

加藤 それでも、夜中の二時、三時でも往診にでかける。崇高な姿に映つたことはあつたでしょう。

開田(子) いや、印象としては良くないんです。(笑)

開田(父) 毎日の様に盛んに夜の電話が鳴りましてね、女房がその度に起きて行きます。そんなことが続いているうちにお乳が出なくなりましてね。栄養失調じゃないけどガリガリに痩せました。

加藤 息子さんは三〇年生れですね。

開田(父) 二〇年というのと、どういう時代だったかなあ。昭和の年号が私の年齢ですから——そうそう、二九年には、今二七〇町といっているカリフト町の町立病院の院長になって行ったんです、二九歳の若造が。七月に昭和天皇が行幸されて昆布温泉に二泊された。救護係として温泉の前のそば屋の二階に泊った記憶があります。

大久保 二九年は洞爺丸台風があるんですね。天行幸の御召船が洞爺丸なのでペンキ塗り替えできれいになってましたよ。夏休みに帰省の時、私乗ってるんです。弘前の教養科でしたから。七月だと思えます。その後の九月二六日が事故でした。夏休みが終わってすぐに試験があった、その最終日に函館の家に帰った連中が行方不明というので大騒ぎをした記憶があるんです。そして岩内の大火。

開田(父) そうそう、思い出しましたよ。

これがまだお腹の中にいる時です。翌年の一月には地元でも大火があったんです。久安先生と一緒に病院の官舎に居まして、女房同士が同じぐらいの予定日でした。火の粉が家の前にドンドン飛んできましたね。お腹の子にアザができちゃ大変というので奥さんたちは早々に引き上げ、われわれは見ていました。久安先生のお嬢さんは節分の日に、これがネ、一ヶ月延びての三月生れなんです。

加藤 幌別での開業は何年ですか？

開田(父) 三七年です。

加藤 七歳ね、物心はついてますね。

池田先生は？

池田(父) 三五年。

大久保 いや、もつと前でしよう。

池田(子) もつと前ですよ。最初が中学生のとき、それから幕西……。

池田(父) だんだん記憶が怪しくなってきた。(笑)

加藤 大久保先生はどうでした？素暗らしい親父さんに感じましたか？

大久保 とにかく酒を飲んでいるのが多い親父でしたからね。尊敬というわけにはいきません。だから医者になりたいと思つたことはなかつたんです。あまり丈夫

でもなかつたので、大臣、大将になりた気はなかつたし、高校の頃は何となく法科に行きたかつたですね。

三村 ホウカ？ ほう……(笑)

大久保 法学というのは、口先だけでもやつて行けるんじゃないかな、と。

加藤 三村先生は、どうでした？

三村 なかなか尊敬する部分もあつたんですけど、尊敬できない部分もあつたりで。それが、年と共にだんだん近づいてきています。ハイ、そんな親父にです。(笑) だから、先生方もおそろくそうだと思つてすけどね。

## 科を選ぶ

三村 私も親父と同じ精神科ですけど、先生方、科を選ぶ時はどうやって——。

池田(子) 僕は、初め耳鼻科とは考えていませんでした。内科医になろうと思つていたんです。たまたま内科の教授に「耳鼻科に行つてもいいんじゃないの。たまに医局に遊びにいらつしゃい」と言われまして。胸部でしたから、それなりに耳鼻科で生きていくところもありますし、音楽が好きですから聴器を直接いじれる。

内科じゃなく、やつぱり耳鼻科かなあと、そういう動機ですね。今になってみれば、時には父の手伝いもできますし、良かったと思つています。

三村 先生はどうでした？

開田(子) そうですね、なんかこう。

三村 お父さんと関係ある方が良いんじゃないかとか？

開田(子) そりゃ、あると思います。

三村 私の一番の理由は楽な科を選びたくて——。精神科なら遊べるんじゃないか、のんびりできるんじゃないかと思つて。いや、親父の生き方とは別にです。

開田(父) 私が勝手に強引に決めてましてネ。自分の科に引つ張ろうと思ひまして、いきなり前の退官した教授にお願いしました。まだ国家試験に入つていない時期なんで、やけに自信あるんだねと冷やかされましたが、新しい教授が来られて直ぐご挨拶に行つたら、荷物をほどこいておられる最中で、一番先の弟子だったわけです。親の強引さもあつて自分の医局に入れたんですが、結局は外様ですから、顔の利くうちに入れたいという考えがありました。

三村 親子が同じ土俵、同じ科ですと、

同じ話題で通じ合いますね。私もそうでした。科が違うとそうはいかないでしょう、単純な意味では。

大久保 ここでちよつと。亡くなつた方や、私たちがみたいな孤児になつた者も居ますけれども、今まで室蘭に在住された先生方を思い出してみたいです。古くは国本先生、耳鼻科を継がれているでしょう。阿部先生は内科ですね。斎藤義太郎先生は内科だけれども息子さん精神科。東先生は婦人科なんです。息子さん外科の出身で一才違う。神島先生外科で整形外科と内科。大久保は皮膚科。三村先生が精神科。皆川先生はお父さんが内科で息子さんは兄が外科、弟が内科ですか。

開田(父) 麻酔科です。

大久保 それから、有賀先生が眼科で、塩沢先生の内科。まだ洩れて居るかも知れませんが以上が父親のない方々です。今もなお元気な池田先生は耳鼻科、開田先生が内科、鴨井先生が外科。千葉先生の息子さんは精神科ですか。上田憲次先生が内科、福永先生が内科、吉井先生の息子さんも産婦人科でしょ。

こう見えますと、息子というものは意外と親しいというか、跡取りの図式が

強いと思うんです。やはり本屋は本屋、餅屋は餅屋にゆくんでしょう。昔からの世襲というか、あまり変わらないものですね。

加藤 逆の方向にはつきりする場合も勿論あるでしょうけど、一種の安全地帯感覚というものがある。親との間で何となく理解されるのかもしれない。結構なもんですよ。日本に限らず、世襲は改めて強く考えられていらない。

開田(父) そうでしょうか。

大久保 私ね、ある意味では正しいと思ひます。一つの伝統が後継者に流れることは妥当だと思ひます。開業医の家族は開業医の何たるかをよく知つています。ですから爺さん・親父・息子と続く家庭医が受け持つ医療は地域医療として大事だと思ひますね。親を診、兄弟を診る、患者の家族を一つの有機体として眺めることができまますよ。豊富な検査データによる医療、これはまた別な医療でしょうから。

池田(父) 僕の親は皮膚科というよりも泌尿器科かな、検定医なんです。検定医ってご存知ですか？ 明治の頃に医者徒弟かなんかやって、正式な医学校を

受けなくても国家試験で医師免許証くれたんです。親父を見てますと今の医者よりもずっと優雅でした。神奈川県平塚なんですけど、菊を百鉢ぐらい作って置いてね。いい花を咲かせるのはたいへんな苦勞なんです。私も手伝わされたから、ある程度は菊の作り方知っています。僕が北大に合格した時、何も言わなし、褒めもしない。北大に行きたいと言ったら、たちどころに「いい」と言っただけです。後から考えると「帝国大学」だった。親父はそういう大学知らないでしょう。帝国大学はこれだ、と思った。それで神奈川県から、とんでもない遠くに来たんです。だから三代目です。

## 綿棒とハイテク

加藤 ここ一〇年くらい医療の歩みが、時には変貌と言える程にスピーディなんです。医事新報を開いても私なんかには経文よりも難しい論文や内容が増えて来て目がちらつくばかりです。

開田(父) 親しかつた医事新報がだん

だん離れて行きます。

加藤 つまづくから先に進まない。

大久保 読むだけまだ良い方ですよ。

開田(父) まだ良いですか、ハッハッ。

加藤 耳鼻科さんで、大ざっぱに言っただけから使っている器具とか、そのまま今に残っているものありますか？

池田(父) ありますね。耳鏡なんか古くさくなっていますけど。息子には自分の設計で好きなようにやれとね。

加藤 綿棒は？

池田(父) 綿棒はこの頃はあまり使わないです。

池田(子) 肝心なところは麻酔のこともありますし、粘膜ですから、確実にいくのはやはり綿棒ですね。痛くなくするために、ポイントに綿棒を入れます。

加藤 昔のドクトルのイメージシンボルだった額帯鏡——今も売っていますか？

池田(父) 売っています、売っています。

私、こっちの目が少し悪いんです。光をいつも入れていたから……五十年位も。一種の「のぞき」ですね。(笑)

池田(子) 僕はもう十年前からハロゲンです。ね。だいたい北大もハロゲン使っています。明るいですし、直接行くのと

間接に行くのと誤差があつてシャドウが出ますから。今は殆どこれじゃないでしょうか。

池田(父) まだ昔のを使っていますが、

ヘッドランプはこっちに来ない、こっちから出ているから、目にはいいんです。息子の手術見ると羨ましいです。ハイテクを駆使してやつてるでしょう。僕は肉眼で、ルーペ三倍位にして、やつと見えた見えたと言つてたんですがネ。光が弱いし。

加藤 ネブライザー、あれなんか病院用も家庭用と似たようなものでしたね。

池田(父) 僕は新し物好きで、ずいぶん入れたんですけれど。

大久保 キーボードについているようなものは？

池田(父) あれはもう、そんなのついていないのは頭が痛くなつて。(笑)

池田(子) コンピュータのオーディオグラムもそうですから、僕は自分で直したりしています。そういう意味じゃ父にはちよつと難しいかな。

加藤 三五年に開業した時揃えた器具は——気胸器・ネラトシカテーテル・十二指腸ゾンデ・小外科セットに耳鼻科用の

セット。それから胃洗浄器と洗腸器。

**開田(父)** 靴に入れたものは、聴診器に血圧計、ハンマー、舌圧子、電池なんかでしたよ。怪我人が来れば縫ったりもしていたし。

**池田(父)** 血球計算器もね、メラランジユールとか。

**開田(父)** ワイセぐらいなら今でもやっています。

**加藤** 染色も一応のものはやりましたでしょう。だから、分、秒という時間単位に強くなりましてね。これが8ミリ映画編集のとき、テープレコーダーと同調装置を使った初期の音入れ作業にもずいぶん役立ったんです。あの頃は、ブルート、ハルン、コート検査から、ともかく手作り診療だったわけで、今思うとよくやっていたなと思いますね。

**大久保** そういうのを使わなくなったら技術料を評価しなくなつた。まだ、あれやっていたら、もつと技術料が上がつてもいい理屈になるでしょ。

**開田(父)** 全然、点数とれなかつたなあ、だけど。

**大久保** 実際にどうですか？ 親父さんが

使った骨董みたいな道具は。

**開田(子)** 全然ノータッチです。内科といつても専門化、細分化していますから。特に僕は十年以上も消化器ばかりで、いわゆる町の一般内科はしておりませんでした。

**大久保** 一足飛びになりますけど、延命処置という問題、どう考えていますか？

**開田(子)** 大病院の立場で言うんですけど、一時間でも一日でも延ばそうと思えば延ばせるんですよ。管入れて人工臓器にすれば癌の末期だつて多少は延びるんです。でもそこまではやりませんよね。痛みを取るようにして、意識がなくなれば無意味な延命はしないと家族にも説明して——クオリティー・オブ・ライフ——無意味な延命は何のクオリティもないですから。大きい病院で最先端であっても、そういうことはなくなつて来ていると思いますけど。

**開田(父)** 私あたりから見えていまして、なんだもう処置やめたのか、むしろ逆にそう思います。注射の内容では彼らの方がいるんなものを入れてやっています。我々は大体内容の知れた単純な補液なんだけども、延命とか何とか、そんな

な理屈なしに最後までやらねばならんという考え。だから物足りないなあ、という感じを受けることがあります。ただ、それでいいんですよ。

**齊藤** 僕が大学出た頃は、亡くなってゆく患者さんに何度も何度も心臓マッサージでも何でもして、という時代が確かにあつたんです。何年もしないうちに無くなりましたね。

**大久保** そういう時は家族の同意を得てですか？ ドクターの判断ですか？

**齊藤** もちろん家族には話します。亡くなつて行く人への心臓マッサージは何の意味もないわけですから。

**大久保** 家族にしてみれば、一分一秒でもという感情はどうですか？

**齊藤** まず納得するようですが。

**三村** それは先生、もういけない患者に対して傷つけ傷つけ針を刺して——尊厳死という観念もあつて。

**齊藤** そこまでしてほしくない、という家族の気持も。

**大久保** 尊厳死というのは本来は昔みたくに畳の上で家族に囲まれて息を引き取るのが根本だと思ふんです。だから病院に送るといふのは、延命のために入れる

んでしよう？

齊藤 在宅でやると結構苦痛が多いですから、病院に送るといふのは苦痛を取り除くという意味だと思います。

沢山 在宅で、往診して——これからはそういう方向でしょう。

三村 開業医がその在宅医療の中心になっていくんでしょうね。

齊藤 だから、在宅で病院と同じような質の医療といふのは大変だと思います。開業医がナース・ステーションみたいになって、家族もたいへんですね。

開田(父) 昔に戻ることなんです。二四時間勤務になってしまうんです。

池田(父) 大変だね。

池田(子) もうひとつには国の考え方ではないでしょうか。これは老人医療の問題があつて、病院ではベイしない。格好いいけれども在宅医療という形ですり替えている面もなきにしもあらず、と僕は思ふんです。

開田(父) そうですよ。日医なんかは結構喜んでる感じを受けるんですけど。

池田(父) スウェーデンかどこかではヘルパーが日本の十二倍だそうですよ。桁違いですね。

## 素直な息子たち

加藤 綿棒から延命、尊厳死、在宅医療と新旧話題の盛り合わせになったわけですが、倫理的には一種の王政復古かもしれないという気がします。なにせ、地球自体が重体なんですから大変です。さて親子の話をもう少し、しましうか。

大久保 齊藤先生のお宅は？

齊藤 僕の父は全く別のことをやっています。僕にしてみれば尊敬できる父親ですけれども、同じ職業だったらどうかかなあと思ひますね。お互い距離がありましたから一寸違った目で見ていたのかなあと思ひますし、今は息子がどうなるのか心配です。(笑)

沢山 うちの息子は小学校に入った時から、お医者になるんでしょうと先生からも友達からも言われ反発して、絶対医者にはならないと。三番目の子は医者になったんです。さほど抵抗なく。

池田(子) 僕はのんきだったから反抗姿勢はなかつたみたい。忙しい時の父とは全く対話がなかつたんですが、こういう苦労があるんだなということは子供の頃

頃から当然のように思っていました。

加藤 親の跡を継ぐ息子というのは素直な子なんです。(笑)

開田(父) 沢山先生がおっしゃったように、親が苦労して上り調子にある時に育つてきて、俺も頑張っているんだからお前も頑張れよというような無言の言葉を感じる時期にタイミングよくぶつかったんでしよう。

三村 息子さんが医者になったこと、どうですか、感謝というかー。

池田(父) そりやそうですよ。共通の話題があるということですよ。

大久保 やはり私も親の事考えているんです。文科でなく医学部に行き、小児科に行きたかつたのに裏工作されても素直になれたのは、親に苦労かけたのを知っていたからなんです。二十何年前にでもこんな座談会をやつたら揃つて出られたのになあと、羨ましく思ひました。

加藤 いつの間にか、こんな時間になつてしまいました。今回は世襲父子の素敵なお話を堪能させて頂き、まことに有難うございました。では、(拍手)

おわり

# あたらしくす

## 歴史的日本製鋼所 部長住宅賛歌

辻 寧 重

(日鋼記念病院)

近代医療の粹を集めたような日鋼記念病院のモダンな建物のすぐ横に、いかにも対称的に、古い木造の平屋建てが数軒並んでいる。比較のおおきな一戸建てと、あとは長屋である。これらはもともと日本製鋼所の住宅であり、現在残っている5つの一戸建ての家は、部長クラスの人が入る住宅であったという。昭和54年の9月に、当時の日本製鋼所病院に勤務することになり来蘭したが、それ以来そのうちの二戸が我家の住宅である。家の造りはさすがに部長住宅であり、あたかも江戸時代の剣道の道場の「たのも」と

言ったら「どーれ」などと言って出てくるような玄関に、床の間つきの8畳間が3つ、サンルームつきの6畳間が1つ、8畳ぐらゐの板の間の台所、風呂桶は小さいが洗い場が2畳もあるような風呂場、その横に同じ大きな洗面所、3畳の女中または書生部屋、同じく3畳の屋根裏部屋、水洗式に直したトイレが2つ、それに南側には長い廊下、さらにムロつきの物置とまことに広いのである。家のまわりはこれまた広い庭があり、それを取り囲むように板塀がありさすがに部長宅は豪邸である。しかしまことに残念なことには、このすべてがいかにも古く、いくら修繕してもいたるところがガタピシしており、またそれでバランスがとれている家でもある。高い床下のすき間や立付けの悪い二重窓からすき間風が入り、夏は涼しく家の中で風鈴がなり、まことに優雅であるが、冬になるといくら目張りしようが無駄である。室蘭に来た当初は冬が近づくと、窓という窓にすべてビニールを貼り、あたかもビニールハウスだなどといったが、2・3年すると無駄であるということが分かり、それ以来冬になると、廊下は外であり、風呂

は露天風呂であると意識改革するようにしている。ガス中毒はおこりえないというのが、唯一の利点とも思われるが、寒々とした冬の夜中にふと目を覚ましたときに、家の中で風鈴がチリリンとなっているのを聞くと、そろそろしいような気がしてくる。はじめて我家を訪れた患者さんや家族、プロパーさんなどは、いまをときめく日鋼記念病院の医師住宅にしてはあまりにも古すぎるので気の毒がり、また新しく着任したドクターも一目みて決して住もうなどとは思わない。日鋼記念病院の職員研修会で講演した市会議員が、「日鋼記念病院は建物も大変立派になったので、それにふさわしい医師住宅も建ててあげてください」と同情してくれたりもする。私自身も野幌の北海道開拓の村に行つて古い民家を見たとき、我家より新しく立派なのではないかと思つたりした。

ところがである。14年も住んでいると、この家も人がいうほどそんなに気の毒な家でないことがわかる。まず床の間のある8畳間を2つつないで居間にしているが、天井は私がジャンプしても届かない程高いので、空間が非常にひろい。床の

間においてあるテレビを見ながら、ゴルフクラブのフルショットができる。畳の上に敷いた絨緞の上では、パターの練習どころか7〜8ヤード前後のアプローチの練習もできる。ただし床がややかしがつているので、余り練習をしすぎると本番で感覚があわない。居間と廊下をつなぐと、1周30mぐらいのトレーニングコースとなる。数年前、夜中にドンドンと音がするので起きてみると、隣に住んでいたやや太めのドクターが、家のなかを走っている影が見えた。また、家のなかにはいろいろな小動物を見ることがができる。風呂場を住み家に行っているワラジムシ、居間が好きなカマドウマ、二重窓の間に張ったクモの巣、時には隊列を組んで現われるアリ、姿はあまり現わさないが冬になると天井裏を走り回るネズミなど、なにしろ我々が来る前より住んでいるので、向こうの方に先住権がある。その気になってみると、ファーブルの昆虫記顔負けの生態観察ができる。特にクモなどは庭にいるものまで含めると何10種類も住んでおり、立派なおおきなクモの巣をつくるものから、まったく下手な巣しかつくれないものまであり、ダ

ーウインの進化論に反論も可能である。神様が生物を創造したとき、酔っ払って造ったかまたは造り疲れていいかげんに造ったとしか思えないものも沢山ある。冬のシバレル朝には洗面所の窓ガラスがまことに美しい羊歯模様をつくりだし、今どきこんなに寒さの芸術が見られる家はないだろうと変に感心したり得意になったりする。

しかしこの家で何といっても素晴らしなのは庭である。20坪もあると思われる広い庭には、春になるとユキノシタ、エレンレイソウ、ヒメイチゲなどの自然の草花に加えて、歴代の住人が植えたと思われるスイセン、サフラン、ボケの花などが一斉に咲き出し、まことに華やかである。5月になると裏山へ続くササの群生のあいだに、ササの子がニヨキニヨキ顔を出し、10分も採れば晩のミソ汁に充分である。ある年には山でササの子を採っていた人が、夢中になり過ぎてそのまま家の庭に転げ落ちてきたこともある。そのほかタランボの芽もとれるし、内緒であるがアイヌネギの密生地もある。年中ミツバが生えているのでオヒタシには困らない。秋には、私の実家から持

つてきた栗の木が屋根を越えるほど大きくなり、最近拾いきれないほどの実を落としてくれる。板塀に自生した山ブドウも、年々実を多くつけるようになり、毎年山ブドウ酒が何本もつくれる。これでキノコが生えだしたらもはやいうことがない。それに加えて私の妻は、庭の一面で畑をつくっている。エンドウ、ササゲ、菜っ葉、ジャガイモなど、最近天候が不順で野菜が高いので、自給自足の練習をしている。からめの大根は絶品で、釣りずきの患者さんがカレイやアブラコをもつて、物々交換にやってくる。庭の草木の芽や花をねらっていろいろの野鳥もやってくる。夏の朝は野鳥の鳴き声で眼を覚ます。ツグミ、ヒヨドリ、シジュウカラ、キレンジャク、モズ、カケス、アカゲラ、そのほか知らない鳥もどんどんやってくる。ボケの木の下でキジが雨宿りしていたこともある。山ブドウもうっかりしている、鳥どもに先を越されてしまうので、収穫のタイムミングが難しい。キャンプに行かなくても、別荘に行かなくても、庭でテントも張れるしバーベキューもジンギスカンも出来るので、その雰囲気を充分味わうことが出来る。な

にしろトイレは完備しているし、雨が降ればさつきと家の中にはいり、暖かいフロンで寝ればいい。木の影になって病院からも隣の家からも覗かれる心配もない。まわりが全部緑なので、やぶ蚊に刺されることを少し我慢すれば、裸になって森林浴と洒落こむことも出来る。中秋の名月の頃には、採りに行かなくても、ちゃんと庭にススキが生えてきて、縁側に机を出して秋の味覚を並べ、月見で一杯とすることになる。ちよつと贅沢を言うことである。

このようなところに14年も住んでいると、自然とはいかにうまくできており、無駄がないことが実感できる。一定の法則に従って自然がまわっているのにも気づく。当たり前のことであろうが、春夏秋冬は必ず順番にやって来る。今年は春の次に冬にしようや、などということはない。春になって菜の花が咲けば、必ずモンシロチョウが飛んでくる。今年はモンシロチョウが来るのが早過ぎて、菜の花が間に合わなかったなどということはない。もちろん人間も自然の一部であることに気づく。“自然を克服しよう”など

という考えはとんでもないことであることに気づく。自然の中でいかに人間とは生きていくべきか、人間とはなにかを考えることが必要であることがわかる。医学も医療も“人間とはなにか”という観点から診なければならぬと感じるようになる。感性と知性のバランスがいかに大切であるかがわかる。“脳死”“移植”“癌の告知”“尊厳死”“延命”などの問題は単なる良悪でなく、“人間とはなにか”という一段高いところから考える必要があると思うようになる。

さて、昭和54年に室蘭に来た時には、例の部長住宅は8軒あったが、日鋼記念病院の増築、看護学校の建設により、現在では5軒になってしまった。そのうち1軒は、昨年産婦人科の先生が出ていった後に入る人がなく、荒れ放題である。家は人が住まなければすぐに駄目になり、せっかくの庭も雑草に埋まっている。14年間ここで過ごした我が家族は、ここを出たらもう二度とこのような素晴らしい家には住めないと、死守するつもりである。

## 我もまたアルカディアに

—イタリー紀行—

上 田 智 夫

(上田医院)

### ミニヨンの歌

「君よ知るや南の国、木々はみのり花は咲き、風はのどかに鳥はうたう」。御存知、ゲーテのウイルヘルム・マイスターを下敷とした歌劇ミニヨンの歌の第1幕。

人は何故古来イタリーに憧れるのか、ゲーテがカルルスバードから突然南に旅立った理由は何か。暗い北ドイツから、明るい太陽の国イタリアを思うのは、北海道の人間が沖繩などの南に思いをはせるのと似ているのか。しかし、ベネチアでも実は緯度では札幌より北だし、まして現代人達が、ティラミスを食べにとかグッチのバッグを買いにだけで出かけていく訳ではあるまい。理由はどうでも腰の定まらない寅さん、再び三度びイタリーへ旅立った。

## ベネチア

「どんなベネチア人でも、ゴンドラに乗るとそうであるように、私も急にアドリア海の主人になった様な気がする。」

某月某日、千歳空港からは新婚夫婦と寅の三人、あてられるなあ。成田からは、大阪の元気のいいおばさん達が目立った。パリでアリアリアに乗り換えて、ベネチア着は夜。ホテルがサンタ・ルチア駅のすぐ前で、カナルグランデのすぐそば、立地はよい。

夜のゴンドラは、ガイド雑誌通りで省略。型の如くサン・マルコ広場から見学が始まるが、世界最古と言われる喫茶店「フロリアン」は順番待ちが並んでおり寅は早々に失礼した。パラッツォ・デユカール（元首宮殿）では色々な思いがよぎる。最も民主化され、権力は（元首を除き）分散し、一年毎に更新される政体ながら（それ故にか）、実力者であつても或る夜突然、シニョーリ・デイ・ノツテ（夜の紳士達）の訪問を受け、十人委員会（C・D・X）の査問の場に引き出され有罪と宣告されれば、「ため息の橋」から垣間見る運河の眺めも、この人の見おさめになる訳である。

「ため息の橋」



固い話はこの位にして早速与太話を。

ベネチアで昼食をとったが、イタめしはかつての寅の記憶しているところでは、アンテパスタ（前菜とでも言うべきか）のスパゲッティだけで腹一杯になったものだが、今回のいかすみスパゲッティは同行の者が「お代わりないの」と言う位のお粗末。これも日本人ツアーがそうさせたのか。

ムラノ島のベネチアン・グラスも見学には同行したが、最初から買う気が無く、島内を一人でブラブラ。

## フィレンツェ

ベネチアは一泊のみで、翌日はパドワ

ア泊りだが到着は夜で見学はなし。朝早くパドワからフィレンツェ行の汽車にのる筈なのにバスの運転手が来ない。添乗員が気のきいた男で、他のツアーのバス運転手を叩き起こして臨時にチャーターして駅にすべり込み。

寅のコンパートメントは、日本人は一人、北イタリアの田舎のおばちゃんのは、ポロニーヤの大学生が一人。化学の学生らしく教科書を読んでいるが、これが英語もドイツ語も全く駄目。やれやれ日本じゃ寅の様な無学の者でも、片言の英語くらいしゃべれるのにな。

良くも悪くも独裁者のメデイチ家と共に歩んだフィレンツェで、ウフィツィ美術館へ。寅さんは、チマブーエ、ジョットなどの宗教画はにがてで、やはり通俗的ながら華やかなボッティチェリの「春」（プリマベラ）や、「ヴィーナスの誕生」がお似あい。そのほかチントレットや、西欧裸体画の原型となつたチチアンの「ウルビーのヴィナス」が目についた。

ところで僅かな自由時間でシヨッピングとなるが、かねて女房殿には目ききについて信用のない寅さん、ここが面目をほどこす所と皮のコートを買に出かけ



アッシジ「僧院ホテル」



ボッティチェリ「ビーナスの誕生」

た。とある店で店員の小娘に「レーザー・コートはないか（どうもこう発音したらしい）。小娘口をゆがめて「レーザー・オー・ノー」。わかったよ日本人はRとLの区別が苦手なんだよ。寅も英語国でないイタリアで、うっかりブローケン英語を使ったのが赤っ恥をかく原因となってしまうた。ただし娘さんよく聞けよ、寅はめでたくカミンリコートを買って帰ったので念の為。

ローマのジャルプラザに、オペラの券の事で電話を入れる用があったが、コートを買った店でローマを呼び出してくれて助かった。あの娘の所でなくてよかつたなあ。

#### アッシジ

ピザはフィレンツェからアルノ川に沿って下った土地、斜塔見学に立ち寄ったが、傾斜がひどくなって危険の為塔には上れず、世紀の大発見をしそこなった。昼食を同地の中華料理店。イタリアで紹興酒を飲んだが、団体で料金が安くまあまあとなることややはり中華料理となるのか。アッシジは山中の村と言った感じ。ホテルは旧僧院の改造とかで、個室は三畳くらい、ベッド、机と床にラゲージを開

くと身体を斜めにしないと歩かれず、シヤワー、便器、洗面台で半畳くらい。僧院のキビシイ生活がしのばれてかえって興味があった。食事は地下の食堂で、決して立派ではないが中々風情があり料理も手を加えてある。

酒をといた事になり、各自白、赤、ビール等をたのんだが、ふと見ると「ビーノ・ノーボ」なるワインが出ている。これぞまさしくヌーボーだろうと注文してみるとピツタリ。しばらくぶりにイタリア・ワインのおいしいのに当たったが、料金は四〇〇円くらい。ちなみに「キャンティ」とは、フィレンツェとシエナの間の丘陵地帯で、この間の土地の酒が「キャンティ・ワイン」だとの事も覚えた。サンフランチェスコ大聖堂では、ここだけはさすがにチマブーエの「聖母子とフランチェスコ」の画がびつたりであった。かねて親交のある「西洋坊主」に絵ハガキ等を購入する。

#### 問奏曲

国道をバスでローマに向かう途中ドレイブインに寄るが、これが貴重な時間。日本人はあまり居ないし、籠をかかえて品物を取り、レジで会計の万国共通のス

タイトル。このこと、タクシー、チップ等だけは、紙きれ同然のリラが必要だ。カフェテリアでも品物を指さして、ドリンクとも金を払って自分で運べばよいので、メニュー探しの苦労はない。ブランド品もなければ、一本ウン万円の銘酒もなく、しつこい勧誘もない。

大阪のおばさんに、イタリヤ酒でスパマンテを教えてほしいと言われたが、銘柄の一種とは知っていたがシャンペン類とは知らず、適当に答えてしまった。

面白いなと思つて買った小型の酒が、所謂「グラッパ」、ワインの絞りかすから作る。よくわからなかつたが、ノックスビル市との交流の時に来た麻酔科医で、先祖はシャルルマーニュ大帝だと言ふ(?)イタリヤ系フランス人で、アルゼンチン育ちで現在ノックスビルに住んでいるという訳のわからない、アルゼンチン・タングを踊る男に教えてもらった。早く言うとなつて所謂「カストリ」らしい。

## ローマ

「羅馬へ行きしことある人は、ピアッツァ・バルベリイニを知りたるべし。こは貝殻持てるトリイトンの神の像に造り做したる、美しき噴水ある大いなる広こう

ぢの名なり。貝殻よりは水湧き出でてその高さ数尺に及べり。羅馬に往きしことなき人も、かの広こうぢのさまをば銅画面にて見つることあらむ」

どうだい古い文章はいいなあ、リズムと格調があらあな。

昼食は、「浜清」で日本食だが、場所を確認して食事をパス、ビツソラーティ通りのジャルパック・ローマ支店に駆けつける為にタクシーで現地へ。七十六番地二Fとなつてているがあたりを見廻しても日本の様なJALなんて標識はない。運ちゃんの指さすビルに恐る恐る入つて二階に上がるとやつと発見。チケットを入手して帰る段となり、「浜清」の名前は覚えていたものの、マツチも名刺も貰つてこず、「浜清」の名前だけでは運ちゃんもお手上げ、思わずあせる。やつと、オーバーナイターバッグに地図が入つていたのを思い出し無事生還、やれやれ。

## トスカ

このプッチーニのオペラをローマで見るとも目的の一つであつた。ローマ・オペラ座の「トスカ」の切符をようやく手に入れ、ヴァチカン市国見学の同行者のバスと別かれ、このツアーの一員だと言

う一筆を貰つて宿泊予定のホテルに駆けつけ、早速バス、ひげ剃り、着替え。まがりなりにもローマ・オペラ座なので、タキシードとはいかないが、背広、ネクタイ着用。

早く着きすぎてまだ開場しておらず、ブラブラしていると、一見紳士風の身なりの小太りの男が近寄つてくる。

男「日本人か。トスカを見にきたのか。」  
寅「そうだ。」

男「まだ大分時間があるな。俺はガルフ石油のアラビア駐在員だが、中東が戦争状態なのでローマに來ている。イタリヤ人は英語を話さないし面白くない(実は本人もイタ公)君の職業は何だ。」  
寅「ドクターだ。」

男「アラビア各地を歩いて、日本人にも沢山会つた。開幕まで時間もあつるし、そこらで一杯やらないか。」  
寅「あつと驚く為五郎、ここらではつと気が付いた。ツアー雑誌によく出ている、麻酔薬を飲まされて身ぐるみ剥がれた体験談を思い出す。」

寅「有難う。しかし俺は待ち合わせている者がくる時間だ。(あたりを見廻す)残念だが失礼する。」

やれやれ危かったなあ、寅さん危機一髪。

舞台はやはり本場、迫力もなかなかのものだったが、トスカがスカルピアを殺したあたりで時間が気になり、幕間の券をもらって外に出る。タクシーはあまり来ない。かつてパリで深夜白タクにぼられた寅さんには気になる。君子(?)危うきに近寄らず、ホテルはボルゲーゼ公園の上で遠い。最後の幕をあきらめやと車をひろって帰る。



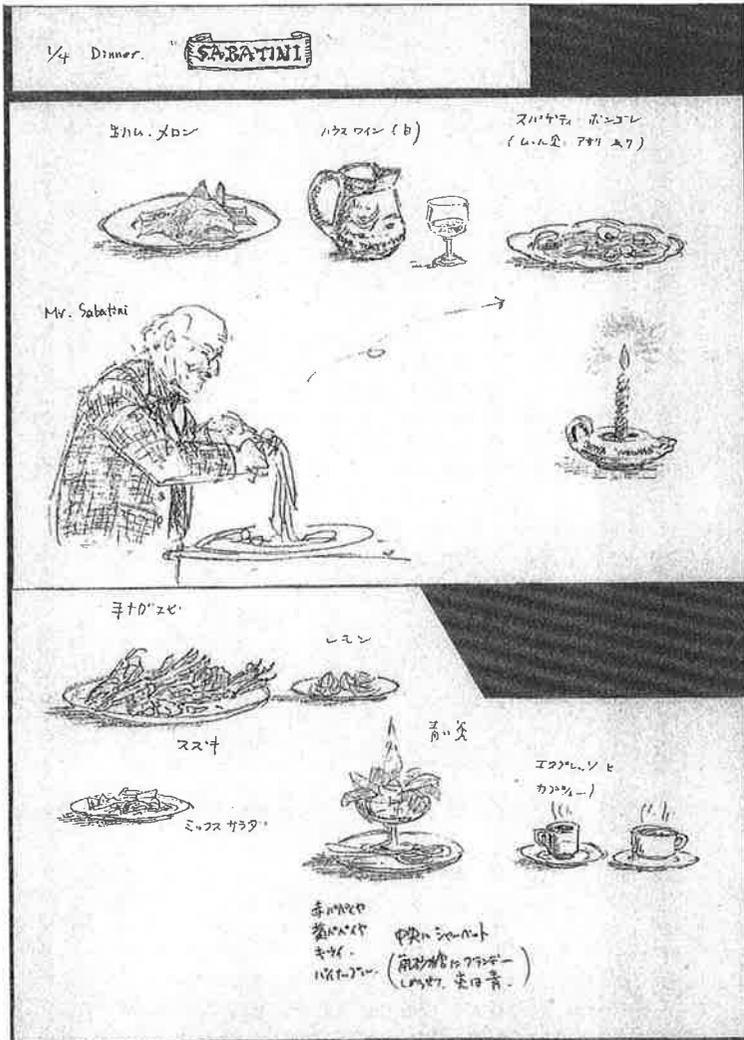
トスカ「幕間のカーテンコール」

### マンジャーレ

折角ローマに来て、ツアー料理ばかりでまともな物を食べないのは癪にさわる。何回か行った事のあるサバティニーにホテルから予約を入れて貰ったが、トラステベレへ行くと言うと、イタリア人のツアー同行者(としか言えない、何もしないのに必ず国の方針でついて来る)は危

険だからよせと言う。ホテルからタクシィを呼んでいるので、フロントが来た人間を知っています。御心配なく。

同行者五名。早目にオーダーしたのがよくてミスター・サバティニーが自分で出て来てサービスする。料理は同行した小島さんの画の通りだが、白ワインも都度有料とせちからくなって来た。





「ボルゲーゼ美術館」



「サバティーニ」にて

翌日のナポリ、ポンペイ行のオプショナルが発売して寅は自由行動。早目に出て、「ボルゲーゼ公園」と「ボルゲーゼ美術館」を見学。その後パンテオンの近くの店「ラ・キッチョラ」に小物を買に行つたが、昼休みの時間帯で午後二時までカフェテラスでエスプレッソを飲みながら待つ。パンテオン見学に来る日本人バスターの忙しそうな駆け足を見ながら、一寸のんびりするの仲間々よいもんだ。あわて者では人後におちない寅さん、調べていったワイン・オープンを買うつもりだが、ボトル・オープンと言つたらしく、珍しくもない栓抜きを買つてがっかり。

出発の日は近所のバルで、コーヒーとサンドイッチで軽食。

#### 帰りは三人

帰りの飛行機の予約が狂つたとかで、一同にもう一日ローマ無料宿泊追加（但し食事は別）というおいしい話があり、結局予定通り泣く泣く帰るのは寅と札幌からの新婚さんの三人だけ。ローマ空港までは送るから、エール・フランスでパリに行き、日航に乗りついで勝手に帰つてくれと有難いお言葉。事故でもあつた

らどうするの。

パリのシャルル・ドゴール空港は御存知の方も多と思うが、飛行機をつくサテライト・スポットから巡回バスでセンター・ターミナルに向かうわけだが、何処で降りるかの確認をしておかねば間違ふ。別のツアーを引連れた添乗嬢、乗つた次のスポットで降りたが再びバスに駆け込み「どこで降りるんですか。」結局お姉ちゃん、センター・ターミナルの日航案内までついて来てやつと安心。

空港ではフォアグラとエスカルゴ程度。酒は買う気がなかったが、007のお好みシャンペン、「ドン・ペリニオン」は当時では日本より五千円程度安かつたが、現在ではデイスカウントショップで殆んど同じ値段。

何とか無事帰国したあと、何事もなく帰りましたかの電話と同時に、残留組が四、五人パスポートやお金をやられたとの情報が入り、やれやれやつぱりローマはあぶないなあ。

# 室蘭市医師親交会40年記念 台湾旅行(高雄)

平成4年11月19~23日

齋藤 美知子  
(若草内科クリニック)



十一月も半ばを過ぎ、朝夕の冷え込みは冬を間近に感じる頃である。『医師会行事参加の為二十日から二十三日迄休診とします』という院内掲示に多少の後ろめたさを感じながらも十二時きっかりに診療所を閉めてあたふたと迎えの車に乗り込んだ。

千歳へ向かうバスの中は次第に実感となってくる旅行の解放感でどの顔もほころびがちだ。これから数日は患者さんのことは忘れて、いや室蘭に残る先生方以後をお願いして我々は遊びまくる。いえいえ旅を共にしながら会員相互の親睦を計りつつ異国の歴史に想いをはせ、風土と味覚を満喫しようというわけだ。

バスの中でJTBの添乗員の赤石さんにこれからの予定の説明を聞き、出入国記録カード、税関申告書を渡されて旅の注意などを聞いているうちにやっと旅への期待と喜びが本物となってきた。

思えば旅行という事で海外へ行くのは初めてである。十年程にもなろうか、家人のお供でアメリカ暮らしをほんの束の間したことがあるが、四歳の娘を片手に一歳の長男を背にジョン・F・ケネディ国際空港に降り立った姿はまさに東南

アジアのポトビールそのものであった。これから三年になるか五年になるか分からぬまま、乏しい軍資金をやりくりして悪名高いブロンクスの高層アパートで、湧き出るごきぶりに戦慄しながら息子のおむつを替え家事に専念するのも、物珍しくて面白いのは初めの一カ月である。英語も全くの不得手であるから八方塞がりの籠の中の鶏と化した外国体験であった。今回は旅行であるから帰る日ははっきりしているのがなによりである。又数日ならば豪遊もできる小金も持っている。私は初めての海外旅行で心が浮き立つのを感じた。

成田に着いたのは夕方であった。大気はどんよりと重く初冬といえども生暖かく人いきれがするようである。ホテル日航成田で各自割り当てられた部屋に荷物を置き最上階の展望レストランにほぼ全員が会して夕食をとった。これから何日かは上げ膳すえ膳、面倒なことは全て添乗員の赤石さんをお願いして、言われるまま、連れられるまま後をつけていけばいいのである。修学旅行と違うのは規則がうるさくないのと食事が豪華なことである。その夜はワインとビールで乾杯し

ステーキに舌つつみを打ちながらしばし先生方の趣味や旅行の話に聞き入った。

翌日やっと目的地台湾へ出発である。日本アジア航空二七五便は成田を予定通り九時五十分に飛び立った。日本には結構多くの航空会社があるものである。あまり聞き慣れぬ航空会社名ではあるが乗ってしまったらもう後は運まかせ、座席は機首に近いエグゼクティブクラスとのことである。三村先生は、階上のファーストクラスしか空いていないということとで差額を払って二階席に行った。いずれにせよ運命は同じである。万が一の時は残された者は一時悲しむであろうが本人は極上のバカンスの最中である。いい人生だったなあと自分にいきかせて目をつむることにする。しかし三時間ほどの飛行時間ではゆっくり不測の事態を考えている暇もない。早速飲み物が運ばれてきてほろ酔い気分になった私は、続いて出された機内食も何年か振りに珍しく、たいそうおいしく味わった。極楽気分であるうちに、もやがかかったような赤茶色の陸地が見えてきた。ステュワーデスの指示で時間を一時間遅らせているうちに機内は着陸体勢に入った。

高雄空港は一口でいうと、日本の離島の空港のようである。もつとも離島の空港に降り立ったことはないが……。建築途中の建物がある為か、鉄パイプなどの資材が通路際においてあり頭上にも構造を成すためのはり突き出ている。我々はベニヤ板をつなぎ合わせた細い通路のようなところをやや歩いて、入国管理の列に加わった。気温は思ったほど高くない。

空港のロビーに「Welcome 室蘭市医師親交会」のプラカードを持ったスーツ姿の男性がいた。この人が我々の旅行ガイドをする東南旅行社の董さん(とうさん)という四十代前半の台湾人だった。

高雄市内へ向かうバスのなかで早速自己紹介と両替の説明を受けた。眼光鋭く体格も良く、小道で一対一で出会ったらちよつと恐い感じである。かなりのインテリであることは言葉のはしはしに伺える。口元はにこやかであるが、眼がまったく笑ってない。後で考えると彼も始めは相当緊張していたのだと思うが私のバスのガイドに対するイメージは霧消してしまった。バスのなかにはもう一人、アシスタントのような女性がいて私はここで五万円

を一万元に両替した。事前に読んでいた旅行案内書によると、台湾は日本と同じくらい物価が高く、あまり買物をするメリットもないようである。せいぜい御土産くらいであろうか、バスの窓からは近代的なビルと何車線もの広い道路、そこを走る車は日本とそう違わないが、車に混じって走るスクーターの多いこと、多いこと、労働者風、会社員風、後の荷台に子供を乗せて走るおばさんやお姉さん、学生、しかもそろいもそろって皆、大きなマスクをしているのには驚いた。一時日本でも女学生の間に、ワンポイントのマスクとか、色づきマスク等が流行ったのを覚えているが、こうも集団でスクーター、マスクをしているのを見るのは圧巻である。しかも決してそれはヘルメット、オートバイの月光仮面風ではないのです。どうしてなのか理解するのにはそう時間がかからなかった。亜熱帯に育つ立派な街路樹はみなほこりを被って真っ白なのである。その日は、高雄港を一望する澄清湖と春秋閣に行ったが、なるほど港もスモッグの彼方にぼやけていた。澄清湖という名に反して湖はどんよりと濁っていたが、何が釣れるのか子供た

ちは釣を楽しんでいた。そう熱くもないのだが大気は湿気を含んでおり、ねむの木に似た葉の大木、がじゅまろ、椰子、ゴムの木など北海道では室内でしかおめにかかれぬものが、これでもかと大きく南国を実感させる。

近くの売店には珍しい果物が並べられており、輪切りにすると星型になるスターフルーツ、大仏様の頭のように凹凸のある釈迦頭、食べ過ぎると酔うと聞いているマンゴー等、一山数個ずつを買ってしめて二百元位だった。日本円では千円になる。ホテルへ持ち帰って早速味見をしてみたが冷たくなかったせいか感激は今一つ。

高雄でのホテルは台湾では一流との董さんの説明である『高雄国賓大飯店』である。いかにも大飯ぐらいの客か超グルメの客ばかりを扱うレストランを想像してしまいが押しも押されぬホテルである。その四川料理はなかなかの味だったが窓もない地下のただ広いだけの場所での朝食は、修学旅行生用コンチネンタルで風情がなくていただけなかった。

その晩は高雄市の繁華街にある小ぎれいな海鮮料理店『海天下』での夕食だっ

たがこれはすごかった。残念ながらメニューは覚えていないがえび、かに、牛、豚、貝類をにんにく、しょうがその他不明の中華用の野菜と調味料で味付けしてきたての山盛りが次々と出てくる。もう食べきれないという頃になって一見豚肉の油いためもどきかと思ったらこれが味わってみると全部ウニである。もったいないと思つたが流石に食べきれなかった。台湾では食事のたびに紹興酒が出てきたが熱燗にして梅干の砂糖漬けのようなものにそそぐとこれがまた口当たりがよくするするといくらでも入っていく。一テーブル十人位で七、八本の紹興酒を空けたと思うが阿部先生の健啖ぶりには恐れ入りました。余つた紹興酒をポケットに入れ、六合路の夜店へ食後の腹ごなしとなった。

台湾はもう夜も更けるといいうのにまだ活動を止めるでもなく、道の両側には祭りのように屋台がならんでいる。肉屋、果物屋、お菓子屋、多少やぼつたく時代遅れかなと思わせる衣服がハンガーに所狭しとぶらさがっている衣料品店。中でも先程の料理に使われていたと思われるえび、かに、たこ、さかな等が日本とは

多少趣を変えて並んでいる魚屋は興味深かった。道路沿いの医院も大抵は夜でも十時頃迄は開けているようである。同業者と思われる人影がこうこうと明るい院内で背伸びをして大欠伸をしているのがガラス越しにのぞかれた。道路に出された粗末なテーブルには仕事帰りの人なのか、いため物と白飯で遅い夕食をとっていた。つい先ほどまで仕事をしていたのであるう父と母に混じっておいしそうにスープをすする幼児の姿が印象的だった。帰りのバスに乗る寸前で近くに高雄牛乳大王だつたかどうか確かではないがガイドブックに載っていた牛乳木瓜汁（パイアマミルク）を買った。ミルクセーキのようで美味しく台北のよりパイアがたつぷり入っているようだ。

翌日、夜明けにはまだかなり間があると思われる中、ゴルフ組はなんでも二ラウンドから三ラウンドもするそうであわいと嬉しそうに出かけて行った。

我々観光組は仏光山から台南へ向かった。道中のバスでは董さんからいろいろ台湾事情を聞いた。台湾の勤務医の給料は卒後五年で一カ月六万元（日本円で約三十万円）台湾のサラリーマンの約二

倍だそうだ。患者負担は一回の受診につき五十元と決まっていた残りには保険診療となるそうだ。安い為、いかなきゃ損とばかりに病院に押しかけ、普通の開業医でも一日に三百人から四百人も診るということである。又ここでも看護婦不足は深刻な問題だとのことだ。

お坊さんの大学でもある仏光山は南国調の瀟洒な建物であるがその廻りを取り囲む赤土の広野はまだ開発途上でスモッグにかすみ忙しかった。

台南は高雄から約三十キロ北にある。鄭成功がオランダからの植民地支配を開いた後、台北に行政機関が移されるまでの約二三十年間、政治、経済、文化の中心地であった。赤いれんが造りの古い家が多く赤嵌樓（ツーカーロー）というオランダ人が建てた城塞は修理中であったが、驚いたのは高い建物に沿って作られた足場が日本のように鉄ではなく物干し竿に使うような竹なのである。マンションやホテルも竹組の足場が多く、事故が多いのではないかなという危惧を抱いた。最近タイのホテルが半壊したニュースを聞いたが台湾も結構危ないものがあるのかもしれない。

翌日は台湾最南端ガランピ岬、熱帯植物が繁る墾丁公園への観光である。田舎の道路沿いに日本ではもう珍しくなった三輪車が置かれ、古びた家の軒先では顔立ちも色も同じような人々がのどかに四方山話に興じている光景は遠い昔にどこかで見ることがあるような懐かしさを覚えた。ガランピ岬は水晶の露天売りがさかんで私も一つ買おうかと思つたが洞爺湖にも似たようなものがあつたのを思いだしてやめた。郷土自慢ではないが岬の美しさでは地球岬の方がいいような気がした。墾丁公園では植物に詳しいという六十代の人が流暢な日本語で色々説明してくれたが懇切丁寧過ぎてあきてしまった。家族連れがピクニックに来ていたが、どの家族も売店で買い求めたお弁当を広げていた。台湾の主婦はお弁当を作る習慣がないのか共働きの疲れでいるのか、ただ怠惰なのか分からなかったが不思議な感じがした。

その夜は台湾最後の晩餐会である。中信大飯店でのミニ満漢全席という皇帝料理だそうだ。ドラの音と清朝時代の衣装をまとつたウェイトレスに出迎えられる部屋に入ると再びドラの音と共に子豚の

丸焼きが運ばれてきた。冬瓜のスープ、伊勢海老、あわびと贅沢な材料の料理が多かつたが期待が大きすぎた所為か口が奢つて来た為か感激は今一つ、ウェイトレスのお姉さんもどういうわけかあまり美形ではなく台湾も人材不足のようだ。

帰りには「少林寺」というあれは薬屋だろうか、火傷の特効薬や若さを保つ薬などを売っている場所に連れて行かれた。真つ赤に燃えた鉄の棒を手から煙がでるまで握つてわざと火傷をし、その秘薬をすりこんで効果を証明しようとするお兄さん、どう割り引いてみても年相応にか見えないおばさんが、若さと健康を保つ薬の効能説明に必死だったが、あの商売も結構大変そうだ。風邪ひき医者が患者を診るようなもので説得力のなさは甚だしい。気の毒な気もしたが結局我々は何も買わずに出てきた。

買物といえ、あちこちで免税店へ立ち寄つたが一步店へ入るとたちどころに売子がまとわりついてくる。ゆつくり品定めをする暇もなくつきまとうのでショッピングの楽しさも半減してしまつた。本来買物大好き人間の私がほとんど何も買わなかつたというのはあの台湾の売子

のお陰である。謝謝：<sup>シエシエ</sup>

この五日間、天候に恵まれ大きなトラブルもなく無事に最終日を迎えた。高雄から台北まで中華航空というローカル線にのり松山へ到着、バスの中でドライバーの董さんが歌う「乾杯」を聞きながら一路桃園へ。お世話になった董さんへも別れを告げて台湾を後にした。

成田空港は休み明けの為か人であふれていた。これだけ人がいるとあれつと似た人がいておもわず挨拶してしまい、あとで考えるとやはり知らない人だと分かって気まずい思いをすることがあるが、どこかでみたことがある人だと思つたらやはり飯島先生が千歳へ向かう待合にいて驚いた。いつも神出鬼没である。帰りの飛行機は今までで一番揺れて千歳を目前にしてまさかね、と一瞬思ったが無事到着。森川先生は奥様がお出迎えになつていて悠然と車に乗り込んだ。

夜更けのバスは遊び疲れて寡黙になつた我々を一路室蘭へ。冷たい雨のなかで道路際の見慣れた家も木も、台湾での味わい深い数日間のお陰でとびきり新鮮に感じられた。



大佛山



龍虎塔



孔子廟

## 新 会 員

### 自 己 紹 介



国 本 孝 夫  
(国本皮膚科医院)

昭和二十六年五月二日伊達市に出生。父親は現在伊達市で国本医院を開業している国本亮太郎です。祖父は以前、室蘭市中央町の小公園の近くで開業していた国本亮平です。兄弟は四人で上に兄と姉がおり、下に弟がいます。

生来虚弱であった私は、さらに追い討ちをかけるがごとくに小児結核にかかり、中学に上がるまでは学校を休みがちで、

特に月曜日に欠席することが多くて『月曜日の男』というあまりありがたくない名前までつけられていました。不思議と中学生になる頃には並の体力を持つようになりました。中学までは伊達市におりましたが、高校は函館ラサールに行き、大学は岩手医大です。医大卒業後は皮膚科に入局し、大学院に進みました。その後、開業前の数年間は秋田県能代市にある総合病院に勤めました。

学生時代は、どちらかと言えば麻雀をする以外は無趣味人間だったのですが、勤務医になってからは突然色々な事に目覚めてしまいました。オーディオに凝って3Dスピーカーを自作したのを皮切りに、次はクロダイの磯釣りに魅せられて連日夜釣り、朝釣りに精を出し、妻には『私はフィッシング・ウイドウね』と言われるありさまでした。ゴルフを覚えたのもその頃で、釣りをとるかゴルフに専念するか迷ったこともありました。

その後昭和五十九年より伊達市で皮膚科医院を開業し、平成三年より登別市に移転してまいりました。今は趣味もかわり、この四、五年はダイビングに没頭しております。時々学会とは関係のない休

院があるのは、ほとんどが南方の島に行っているせいです。今年は患者さんに多大なる迷惑をかけるかも知れない夏期休暇をつくり、シパタン島(ボルネオの属島)という絶海の孤島へダイビングにでかける計画をたてました。

帰ってきた後、診療所が無くなっていくのではないかと不安に思うのですが、開業医もまとまった休暇をとる事を容認していただく時代になりつつあるのではないかと都合よく言い訳しております。週休二日(土日)をとりいれ、代わりに休日(第一日曜)診療や夜間(第三水曜)診療を始めたります新人類ですが、今後ともよろしく願います。



国 本 え み 子  
(国本皮膚科医院)

平成三年六月より、登別市新生町にて、夫と共に「くにもと皮膚科医院」を開業し、室蘭市医師親交会のお仲間入りをさせて頂きました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

出身 岩手県盛岡市

出身校 岩手医科大学医学部第二十五

期卒。

昭和五十一年七月医籍登録。

同年、母校の皮膚科学講座へ

入局。

その後、昭和五十三年より五年間にわたり秋田県能代市の山本組合総合病院並びに同県鹿角市の鹿角組合総合病院の皮膚科に、非常勤医として勤務。昭和五十九年一月に夫の故郷である北海道伊達市にて開業し、現在地に移転して今日に至って居ります。

とくに趣味と言えるようなものとて無く、あまり面白味の無い人間だと長い間思つて参りましたが、昨年末より始めたパソコン通信が思いのほか面白く、現在はこれに熱中して居ります。パソコン通信というのは、簡単に説明致しますと、パソコン（又はワープロ）と電話回線を利用した種々の同好会の集合体のようなものです。自分の好きな時間に、自分の意見などを書き込んでおくと、それぞれの会員の方々が、各自の都合の良い時間にそれを読み、それに対する意見などを書き込んで一種の会話が進行してゆきま

す。それで一体何が面白いのかと聞かれれば困つてしまいますが、これだけは実際にやってみないとその面白さは理解できないとしか申し上げられません。ちょっと口では説明したいものがあります。医療関係者のフォーラム（パソコン通信では、同好会のようなものをフォーラムと呼びます）もいくつかありますので、親交会会員の諸先生方も、興味がありましたら始めてみてはいかがでしょう？ いろいろな職業の方と知り合うことが出来て、世界が広がります。……こんな感じで自己紹介になりましたでしょうか？

## 角 哲雄

（恵愛病院）

平成四年四月から医療法人社団友愛会恵愛病院に勤務しております。恵愛病院赴任までは、昭和五十二年から平成四年三月まで北大精神医学教室に在局し、尊敬する山下格教授の御指導を仰ぎながら、てんかんと脳波の臨床および実験的研究に従事しておりました。学位論文は「海

馬および扁桃核発作に対するフェノバルビタールの抗けいれん作用—キンドリングモデルと慢性投与法を用いた検討—」というものです。途中、国立てんかんセンターに一年、マイアミ大学神経学教室に一年、それぞれ留学し貴重な経験を積むことが出来ました。昭和六十二年九月から平成元年三月まで北大病院精神科神経科病棟医長、平成元年四月から平成四年三月まで講師兼医局長を命じられました。大学病院では（他の総合病院でも事情は同様と思われませんが）他科入院中の患者が精神科問題を呈することが少なからずあり、病棟医長時代はそのような患者への対処、いわゆるリエゾン・コンサルテーション精神医学を学ぶ機会に恵まれました。しかし、当院は単科の精神病院ということもあり、他科のドクターから御相談を受けることはほとんどありません。問題が生じましたら、どのような事でも御相談くだされば何らかのお役に立てるのではないかと思います。さて、当院長遠藤秀雄先生に触発されて、昨年七月からゴルフを始めました。やる前は、「こんなもの、すぐ上手になるさ」と思っていたのですが案に相違して

思ったようには行きません。スコアはただ言うのとはばかれるレベルですが、それでも今年白鳥コースの8番ホールで、何がどうなったのか二百七十五ヤードのスーパーショットが飛び出したのです。その後、これ程飛んだことは一度もありませんから、これはまぎれもなくまぐれそのものなのですが、しかし今でも大空を切りさいてはるか彼方に白球が消えていったあの快感を忘れることができません。これからも、また再びの快感を求めて、性懲りもなくドライバーを振り回していくことになりそうです。しばし練習に励み、もう少し上達したら医師会コンペにも参加させて頂きたいと思っております。その節はどうぞ宜しく。

—終—

## 池田 洋輔

(池田みみ・はな・のどクリニック)

一昨年五月に、高卒後三十年経過し帰蘭しました。そして新日鉄病院耳鼻咽喉科に約一年間勤務し、昨年七月二十日に

開院し今日に至っています。

やっと開業医の生活に慣れてきた今日この頃で、趣味は？と問われると「音楽」としか答えられません。多忙な一日が終わって出来ることは読書、CDを楽しむ事位で、殆んどスポーツ等は不可能です。それでも休日好天の日は出来る限り太陽に当たる様に心がけていますが、晴天の日は少なく残念です。

音楽はクラシックが主体ですが、ロック以外であればジャズ、シャンソン、ニューミュージックも好みます。私が音楽好きなのは家庭環境にもよると思います。父・母・妹(声楽家)も昔から音楽好きで私の胎児期からSP盤をよく聴いていましたので自然に胎教となった様です。よく家族で合唱したものです。

東京在学中、中学時代の合唱部の先輩宅のステレオの音と私の音と大きな違いに驚嘆して以来、秋葉原通いが始まりオーディオにのめり込む事となりました。苦しみながらも自分が聴いたコンサートの音に近づく事が可能になって来ました。が、帰蘭条件の一つであった父の病室(二十畳)をリスニングルームに改造し、一応満足してます。ステレオ装置は大小

二十四個のスピーカーが中心で、これらをディレイ装置で残響音とメインの音の管理をして各種のホールの「響」を再現する事が出来る様になり、今日はサントリ・ホール、明日はベルリンフィルと楽しんでます。オペラは100インチのスクリーンで映像と共に楽しめます。

現在の悩みの一つは北海道に良いホールが少なく、世界の一流演奏家の音楽に接する機会が非常に少ない事で、このステレオ装置はとても貴重なものとなりました。

しかし東京より良い所もあります。それは新鮮な魚介類、新鮮な空気、そして自然がすぐ近傍にあり、生活雑音が小さくプライベートな生活空間を広くとれ、今後の人生は快適なものとなりそうです。以上とりとめなく記しましたが、これを機会に不肖池田をよろしく御願ひ致します。

## 親交会入会に際して



開田 博之

(開田医院)

この四月より登別市に於いて父親と共に診療を始め、同時に室蘭市医師親交会に入会させて頂きました。宜しくお願ひ致します。

一九五五年ニセコ町出身で、昭和三十七年登別に転居して参りました。室蘭栄高・杏林大学医学部卒業後、北大第三内科入局。その後札幌厚生病院消化器科、札幌愛育病院消化器科、市立札幌病院消化器科勤務し、今日に至っております。ご覧の通り『消化器系一筋』と言えは聞かぬが、消化器系しか判らないというのが現状です。プライマリーの勉強を一からやらなければなりません。が今までの経験を少しでも生かした診療をして行きたいと考えております。

スポーツはスキー一筋で地元カルルス

で一級を頂き、学生時代には競技もしておりましたが、最近ではファミリーゲレンデ専属となりました。

ゴルフはオフィシャルハンディを頂けない(0ではありません)という程度、あとはテニスを少々というところです。

当親交会とは別組織かも知れませんが、小学生の頃にM M Cという小旗を掲げて各地をドライブするのを大変楽しみにしていた事を鮮明に記憶しております。楽しい企画を期待しておりますと共に今後とも当会には積極的に参加したいと存じますので宜しくお願ひいたします。

☆ 本号から新しく会員になられた方に、プロフィールを紹介して頂くことにしました。

(編集室)

## 親交会のおもな行事

○ 受賞祝賀会及び忘年パーティー

平成4年12月11日

於 ホテルサンルート室蘭

○ 平成5年度定期総会・懇親会

平成5年5月20日

於 ニュージャパン

○ 親睦旅行(日帰り)

平成5年7月17日

於 マリンパーク ニクス  
天華園

○ 秋の行楽会

平成5年9月30日

於 ビア・キャビン エレガ



# 室蘭市医師親交会会員名簿

(平成5年9月末日)

氏名	医療機関又は勤務先名	入会
安立 かほり	安立医院	昭和27年
米澤 堡	米沢医院	〃
高橋 陽夫	高橋医院	〃
中村 秀	老人保健施設エバグリーンハイツ室蘭	〃
石突 信	石突医院	〃
曾根 清孝	曾根医院	昭和30年
池田 洋二	池田耳鼻咽喉科医院	〃
国本 鎮雄	国本耳鼻咽喉科医院	〃
遠藤 孝二郎	遠藤医院	〃
大岩 昌生	大岩医院	〃
大辻 祐太郎	大辻内科医院	昭和31年
深瀬 政俊	深瀬医院	昭和32年
千葉 壽良	医療法人社団千寿会三愛病院	〃
徳田 敬太郎	徳田小児科医院	〃
高橋 ハル	高橋医院	昭和34年
狩野 正直	狩野医院	〃
黒光 康夫	黒光医院	〃
福永 文二	医療法人社団福永医院	昭和35年
上田 智夫	上田医院	〃
阿部 昭治	港南医院	〃
鴨井 清一	鴨井医院	〃
加藤 治良	加藤内科医院	昭和36年
吉井 正仁	愛生病院	〃
斎藤 義寛	斎藤医院	〃
高橋 昭三	愛育小児科医院	昭和37年
飯島 三男	飯島医院	〃
築田 浩明	医療法人社団三樹園会登別中央病院	〃
広瀬 欽也	広瀬医院	〃
鴨井 清成	医療法人社団鴨井内科医院	〃
開田 吉廣	開田医院	昭和39年
藤田 徹	藤田内科小児科医院	〃
神島 茂夫	医療法人社団神島整形外科医院	昭和41年
藤兼 和男	ふじかね内科医院	〃
竹内 隆一	竹内産婦人科医院	〃
大久保 洋平	大久保医院	〃
鈴木 久雄	皮膚科泌尿器科鈴木医院	〃
岩倉 秀夫	岩倉医院	〃
本庄 晋一	本庄医院	〃
鈴木 健弘	医療法人社団鈴木内科	〃
原田 一洋	はらだ外科医院	〃
東 浩	室蘭船員保険診療所	昭和42年
下地 晋	医療法人社団下地外科	〃
遠藤 秀雄	医療法人社団友愛会恵愛病院	昭和43年
木戸 就一郎	木戸医院	〃
田中 豊典	医療法人三樹園会登別中央病院	昭和44年
後藤 正邦	後藤医院	〃
高島 信治	高島外科医院	〃
大谷地 公迪	大谷地眼科	〃
堀尾 行彦	堀尾医院	〃
村井 玄乙	室蘭赤十字血液センター	昭和47年
小田切 醇	小田切耳鼻咽喉科医院	〃
島山 正照	白鳥台医院	〃
山本 俊一	山本内科医院	〃
斎藤 修弥	医療法人社団斎藤外科医院	〃
大川原 修二	医療法人社団医修会大川原脳神経外科病院	〃
神島 章	医療法人社団雄保会かみしま内科小児科病院	昭和48年

氏 名	医療機関又は勤務先名	入 会
熊谷 弘 夫	医療法人社団熊谷医院	昭和48年
児玉 直 彦	医療法人社団児玉泌尿器科医院	昭和49年
大吉 清	大吉整形外科医院	〃
斎藤 茂 樹	市立室蘭総合病院	〃
大鹿 徳 洋	大鹿耳鼻咽喉科医院	昭和51年
三村 博 通	医療法人社団積信会三村病院	〃
森川 亮	森川内科医院	昭和52年
久安 正 道	久安外科医院	〃
澤山 豊	沢山クリニック	〃
皆川 和 廣	皆川病院	〃
皆川 芳 徳	皆川病院	昭和54年
西村 昭 男	医療法人社団日鋼記念病院	〃
安藤 修 一	本庄医院	〃
斎藤 光 史	医療法人社団青雲会さいとう外科	〃
三村 信 輔	医療法人社団積信会三村病院	〃
有賀 和 雄	医療法人社団有賀眼科医院	〃
松田 幹 人	松田内科クリニック	昭和55年
岡田 健 一	高砂産科婦人科病院	〃
西島 毅	高砂産科婦人科病院	昭和56年
栗林 博 子	医療法人社団栗林眼科医院	〃
大久保 淳 子	医療法人社団大久保眼科医院	昭和57年
小田代 亨	室蘭駅前クリニック	昭和58年
塩澤 英 光	東室蘭医院	〃
森田 益 津	財団法人室蘭・登別総合健診センター	〃
西里 弘 二	西里内科循環器科医院	昭和59年
安田 隆 義	医療法人社団日鋼記念病院	〃
辻 寧 重	医療法人社団日鋼記念病院	〃
村上 匡	市立室蘭総合病院	〃
川上 敏 晃	医療法人社団新日鐵室蘭総合病院	昭和60年
菊入 剛	市立室蘭総合病院	〃
丸田 浩	市立室蘭総合病院	〃
古賀 健一郎	医療法人室蘭太平洋病院	〃
足永 武	医療法人社団新日鐵室蘭総合病院	〃
柳川 志 公	医療法人社団柳川内科医院	昭和63年
斉藤 甲斐之助	医療法人社団若草内科クリニック	〃
斉藤 美知子	医療法人社団若草内科クリニック	〃
稲川 昭	医療法人社団いな川こどもクリニック	平成2年
鴨井 清 貴	鴨井病院	平成3年
西田 陸 夫	市立室蘭総合病院	〃
畠 正 一	水野谷医院	〃
福永 純	医療法人社団福永医院	〃
佐藤 東 一	洞爺松井病院	〃
勝俣 哲 男	北海道室蘭保健所	〃
上田 憲 次	医療法人社団上田病院	〃
上田 哲 史	医療法人社団上田病院	〃
木下 博	市立室蘭総合病院	〃
国本 孝 夫	国本皮膚科医院	〃
国本 えみ子	国本皮膚科医院	〃
横山 洋 子	市立室蘭総合病院	〃
角 哲 雄	医療法人社団友愛会恵愛病院	平成4年
新井 良	あらい内科医院	〃
池田 洋 輔	池田・みみ・はな・のどクリニック	〃
野田 明	医療法人社団太田医院	〃
開田 博 之	開田医院	〃
國本 清 治	医療法人社団新日鐵室蘭総合病院	平成5年

## 会 員 異 動

平成 4 年 10 月～平成 5 年 10 月

年・月	事 由	氏 名	医療機関名
4・10	退 会	東 佐 藤 善 弘	(東京都) 佐藤耳鼻咽喉科医院
4・11	逝 去	藤 合 原 初 昌	(大阪市) 三村病院
5・2	退 会	河 松 木 野 開 博 道	室蘭太平洋病院
5・3	逝 去	松 原 村 田 博 道	太田医院
5・4	入 会	木 野 開 博 道	開田医院
5・4	入 会	野 田 水 庭 シ 昌	(室蘭市)
5・4	入 会	開 田 水 庭 シ 昌	(室蘭市)
5・5	退 会	清 桜 木 國 柘	(恵庭市)
5・5	退 会	桜 木 國 柘	新日鐵室蘭総合病院
5・8	退 入	木 國 柘	(青森市)
5・8	入 会	木 國 柘	
5・10	退 会	木 國 柘	

## 編集室へのお便り

波く鳥十三号ご惠送下さいまして、誠にありがとうございます。

いつも波く鳥を手にしてうれしく思うことは、患者として逢うだけの触れ合いのお医者さんの普段の人間の情とか味わいを知ることができるということでした。

曾根先生の一句  
老母に会う只それだけの春の旅  
同じ俳句作りの一人として心に留めておりました。

室蘭市幕西町一一一

稲月 螢介

(五・一・二十五)

拝啓 時下益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

このたびは、刊行物を御寄贈下さいましてありがとうございます。貴重な研究資料として永く保存し利用させていただきます。

なお、今後とも発行の折は御惠送くださいますようお願い申し上げます。

砂川市西四条北二丁目一番一号

砂川市立病院

院長 南須原 浩一

(五・一・二十二)

このたびは、波久鳥第十三号の図書館資料を御惠贈くださりまして、誠にありがとうございます。

本館の貴重な資料として永く保存し、広く市民の利用に供し、御厚意に添いたいと存じます。

ここに厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも御支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。

登別市中央町五丁目二十一番一

登別市立図書館

(五・一・二十六)

## 編集後記

秋も深まり初雪の便りもチラホラ聞かれ波久鳥をお届けする時期が参りました。

今年は一月初々の釧路沖地震、北海道南西沖地震、相次ぐ台風の上陸等々天変地異に驚かされたり、小和田雅子さんとプリンスのロマンスが日本中を沸かせ、新党ブームは三八年続いた自民党政権にピリオドを打たせ細川連立内閣を樹立させまさに今年は「変革の年」でした。

「波久鳥」も発刊以来十四年そろそろ世代交替の時期か？「親父と息子その風景」池田先生、開田先生二組の現役親子を囲んでの座談会は新旧対比を試みましたが息のあった親子関係をほのぼのと感じさせられた次第です。

「波久鳥」には無くてはならない加藤先生には古典との付き合い方を、上田先生には海外旅行で気を付けることを軽やかなタッチで書いて頂きました。

久方振りに長老の中村秀先生より「恩師の思い出」として解剖学の泰斗として

有名な平沢興先生の話を投稿して頂き有難うございました。

千葉寿良先生には第七号で「杏眼」について玉稿を頂きましたが今回は「中登別周辺について」投稿して頂きました。

豊かな自然に囲まれ、自然との共存を願う先生に共感を覚えました。

自然と云えば辻先生の「歴史的日本製鋼所部長住宅賛歌」先生の人柄がにじみ出て非常に面白く拝見しました。

昨年は親交会創立四〇年の節目に当り記念の旅が台湾と決まり斎藤美知子先生にその旅行記を書いて頂いたが、克明且つ丁寧な描写で参加しなかつた我々にもその雰囲気伝わって来るようです。

美知子先生本当にご苦勞様でした。

親交会の会員も年々変化が見られ退会される方もあれば、新しく入会された先生も多数居られます。今号では現会員名簿を載せると共に、最近入会された五名の先生の自己紹介を載せました。

原稿を寄せられた先生方、座談会に出席された先生方、そして編集、印刷、校正等に奔走した高橋氏始め事務局の皆様

に深く感謝申し上げます。

## 「波久鳥」十四号編集委員

加藤 治良  
村井 么乙  
澤山 豊  
大久保 洋平  
三村 博通  
丸田 浩  
斎藤 甲斐之助

事務局 高橋 則夫  
小杉 修一

### 親交会誌 波久鳥

発行日 平成五年十二月二十日

発行所 室蘭市医師親交会

印刷所 室蘭印刷株式会社